

袂換 袂褲 單衣

單褂兒 單褲

替斗子 圓蓬頭

草簾 草帽

關帝廟會

大旱 單刀會

旱年 磨刀雨

夏至 黃梅節

工等にも僅か半日しか休暇を與へないし、また餘分に賃金も出さない。

農夫たちは端午節を期して、舊三月から着てゐた袴の上衣と股引（袴と袂褲）を脱ぎ捨て、單衣の上下（單褂兒と單褲）に衣更へする。そして、野良仕事をする者は、替斗子又は圓蓬頭（草簾）とよぶ葦や高粱稈で編んだ障笠に似た草帽を被るやうになる。

舊曆五月十三日は「忠義神武靈佑威顯護國保民精誠綏靖翊贊宣德關聖帝君」といふ長い肩書を持ち滿支民衆の絶大な尊信を博してゐる軍神關帝の誕生日に當るので、關帝廟のある部落で關帝廟會が催される。舊二月の祀關岳が儀式ばつてゐるのに對して舊五月の關帝廟會は極めて民衆的な親しみある祭禮である。

北支那方面では「大旱不過五月十三」といつてこの關帝單刀會には旱年でも雨が降るものとし、當日の雨を磨刀雨と稱するといふ。

端午節と關帝廟會と前後して陽曆六月二十一日ごろに夏至（黃梅節）

最大日暈

高麗

遼氣 旱天

がくる。

北寄りの滿洲だけに、夏至ともなれば日が著しく長くなり、海拉爾の如きは、午前四時五十五分に日が出て、午後九時十分にやつと日没である。黒河の如きは一日の最大日照時數十六時間四十分及び。

つまり、一日の三分の二は太陽を戴いてゐるわけで、氣温も急激に上昇する。無霜期間わづか三ヶ月ぐらゐしかない滿洲が、今日世界的な農業國として知られてゐるのも、要するに、短い無霜期間に晴天が打續き日照時間が永く、且つ夏期高温を持続するといふこの天惠的氣候の妙に他ならない。

滿洲では内地の同緯度の地に比し一年に一千時間も日照時數が多いのである。

滿洲の六月は、内地が梅雨期であるといふのに、時々夕立が通り過ぎたり、沿海地方で涼氣が罩めたりするほかは、日にも毎日旱天つづきの

ことが多く、谷子（粟）や大豆の第二回目の除草がはじまらうといふ時季になると、農民たちは天を仰いで長嘆息することが多い。

農を本とする満洲や支那では、農業組織が幼稚で、自然の脅威に對して施す術を知らぬため天候の如何によつて、農民の生活が直ちに左右される。それを五風十雨の風調雨順を祈る氣持ちは一入であつて、たいいてい部落には土地廟と龍王廟だけは奉祀してあるものである。

いふまでもなく龍王は「九江八河主。五湖四海神」といはれてゐるやうに行雨と泉水と海上の守護とを兼ねた水神様である。従つて、井戸のある村や海邊の漁村には大なり小なり廟が營まれてゐて、紅紙に「四海龍王。海不揚波」とか「慶雲固海宇。霖雨不捨生」などと書いた對句が廟の神扉の兩側などに貼りつけてある。

さて、早魃となると、農村では偷龍王といつて、雨の降つた村の龍王廟から神位を偷み出して來て、自村の龍王廟に合祀し、若し望みどほり

五風 十雨

風調 雨順

土地廟 龍王廟

行雨 水神

霖雨

早魃 偷龍王

雨が降つたら賑々しく行列をつくつて送りかへしにゆく。併し、雨が降らないといふことになれば、いつまでも返しにゆかないばかりか、神位を街頭に抛り出して水をかけたり、石を投げつけたり、棒で叩いたりして散々神様を虐み「かうされるのがお厭なら雨を降らして下さい」と口口に蟲のよいお願ひをし「萬一雨を降らして下さいならお官の改修をしてあげませう」とか「盛大なお祭りを致しませう」と條件づきで節おもしろく口説きたてる。

早魃がひどくなると、各鄉村では、偷龍王が益々盛んになるので、自村の龍王廟の守衛を嚴重にし、村の壯丁たちが夜間交替で不寝番をするとか、ひどい時には暴力沙汰まで起るといふことである。

北支那地方では、各鄉村聯合の下に掃河底即ち「河ざらへ」とでもいふべき大規模の雨乞ひ行列が行はれる由である。先づ手に手に柳枝で編んだ塵取り（簸箕）を持った十歳ばかりの男女各十二人を先頭に、各々

掃河底 河ざらへ

雨乞ひ

十二人一組の箒を持った寡婦、龜・魚・蝦・淺網等の水族に扮した獨身男子、銅板と二又の鋒を両手に持つて鬼の隈取りをした妻帯者都合六十人から成るこの異様な行列の後に八人の男に、擔がれた龍王の御神輿(黄色の綵亭)がつづき、まだそのあとから柳圍ヨシヅメといふ柳の枝を輪にした帽子をいたゞき黄色の小旗を持った多数の村人がついて、各郷村を雨が降るまで練り歩くのださうである。そして河とか水たまりのところに通じかかると、塵取りを持つた少年少女はその水をすくつて「風調雨順」と大聲で三度叫びながら振り散らし、寡婦たちは、その底の土を掃きながら「河底がきれいになつた、明日は大雨だ」と大聲で呼ばはる。水族と鬼に扮した連中は村々で踊り、また行列の殿りをうけたまはる村人たちは廟や井戸のあるところでは必ずその土地の人たちと一緒になつて香を焚き、三跪九叩して降雨を祈願し、各村有志は龍王の綵亭に清水をふりかける。かうして、その日の宿所に當てられた寺廟に着くと綵亭を安置

し、龍王の神位に更めて供物を供へ、鐘や爆竹を鳴らし、焼香して村人一同禮拜するといふことであるが、滿洲では、このやうな雨乞ひの例は餘り見聞しない。

先年、六月廿六日から三日間、旅順附近の滿人が雨乞ひをしたことがあるが、その時には村民各戸の入口には右に「油然作雨」左に「沛然下雨」中央に「供奉九江八河五湖四海行雨龍王之神位」と大書した貼紙をし、祭壇には蠟燭を立て楊柳の枝を手向け雨神うしんの來降を祈願した。また、各所の廟宇や觀祠では、毎日午前七時と正午と午後七時の三回、各會屯の會長や僧侶の司會の下に村民たちは例の柳圍即ち楊柳を輪にしたものを頭にいたゞき、眞剣に雨乞ひの祈禱をし、鮮魚商や肉屋、飲食店等も三日間休業をして肉食斷つて求雨もとあめを願つたものであつた。

復活祭から四十日目のキリスト昇天祭は、五月末か六月初旬、五十日目の三位一體祭(聖ツロイツツア)は聖靈降臨祭ともいひ、たいてい六

作雨

下雨

雨神

求雨

昇天祭 三位一體

ツロイツツア

聖靈降臨祭

月の初旬から中旬ごろにやつてくる。

ギリシヤ正教を信奉するロシア人たちは、この日を父なる神、子なる神、聖霊を一體とする神の三位一體のお祭日とし、正教徒の上に聖霊が降臨するのを祝ふ。

當日、正教寺院は青草や色とりどりの花で飾られ信徒の家々でもオーソカといふ菅草を家中にばらまいて、二三日のあひだ草の香の中で生活する。

ハルピンの街頭で、芍薬の切花を大きな籠に入れ、鈴蘭の花束を一握りぐらゐづつ廣い葉にまいて賣つてゐるのもこの聖霊降臨祭のところで、ロシア人の大人も子供も、東滿洲の谷間に咲いたであらう香り高い鈴蘭の花束を襟に挿したり両手に捧げたりして、足どり軽く舗道を散歩してゐるのを見かける。またその翌日は聖霊が十二使徒に移つた日として、街頭で出あつたロシア人たちが「祭日を以て貴方を祝ひます」とか、單

オーソカ

菅草 草の香

切花 鈴蘭の花束

に「祭日を以て」といつた挨拶を交はす。

復活祭後九週間目の木曜日に、哈爾濱に住むポーランド人のローマンカトリック教一(天主教)の教會ではキリスト聖體祭が催される。

このお祭日は、キリストが磔刑になる前日を記念するためのお祭なので、實際は復活祭前の木曜日に行ふべきものであるが、その時期は色々な行事が輻輳するので、六月末乃至七月初旬の當日まで延期されるのである。

哈爾濱では、草祭ともいふべきツロイツアからひきつづいて、この時季は楡の實が散る絶好の季節で、その日ポーランド教會では教會で祭儀をすませたのち、キリストの聖像を捧持して、白づくめの清淨な晴衣をつけた少年少女を先頭に、滿人教徒も加はり、大直街の教會から傳家甸の教會まで道一ばいの白い行列をつくつて静々と行進する。

六月八日はロシア文化の日といはれてゐる。

聖體祭

草祭

楡の實

白い行列

文化の日

貧窮

春窮期

青黄不接

青食

この日はロシア最大の詩人でありロシア文學の創始者とされてゐる天才アー・エス・プーシキンの誕生日である。白系露人のあひだでは、一九二八年から當日をロシア文化の日と定め、哈爾濱では中央寺院で宗教儀禮を行つたのち一般の祝賀祈禱があり、在留露人や學生たちが旗を押立て樂隊を仕立てて参列する。そして夜は祝賀音樂會などが華やかに舉行される。

五月末から六月にかけて雇農、小小作農、零細自作農といふやうな貧農たちの生活はまことに苦しくなる。

この時期は「春窮期」とも名づくべき時期であつて、滿人農民たちは「青黄不接」とよんでゐる。

それは、去年からの作物の蓄へはすでに食べつくし、さりとて今年の最も早く穫れる玉蜀黍（包米）の青食には尙早といふ端境期で、貧農たちは節食を餘儀なくされる。

高粱粥 曲麻菜
粥麻菜

菜園子

老頭兒歡喜

鹿掛 懷餅
猪官兒 豚追ひ
看羊的 牧夫

ちやうど除草期に當るので、相當に忙しい時ではあるが、たいていの農家では一日二食とし、それも朝は高粱粥、夕食は曲麻菜（粥麻菜）といふ野草の若芽を園子にして食べるものが多い。

女子供が摘んで來た曲麻菜を茹でてまるめ、それを高粱の粉でつくつた菜園子の餡がはりに入れて代用食とするのである。

俗に「菜園子」とか「老頭兒歡喜」などといふ名でよばれてゐるが、その不味さはひととほりではないといふ。

貧困の甚だしい地方になると、男の子など褲子（股引）もはかず、紅や藍色の金太郎胸掛や印花粗布（緋）の腹掛（懷餅）一つで猪官兒（放牧の豚追ひ）、看羊的（山羊の番人）や牧夫に雇はれて、終日棒ぎれ一本持つて廣い野原を豚や山羊の守りをしながら彷徨してゐる。

これらの少年たちは、きまつて河豚のやうに大きな腹をしてゐる。これは、榮養を質で擲るのでなく、粗食を量でとるため、しぜん大食して

褲子無し、裸足

腹を膨らましてゐるのだといふ。
初夏の夕べ、顔色の悪い褲子無しの裸足の子らが、アカシヤの花を頬張り啖らひ、散つた花房から蜜を吸ひとつてゐるのは哀れである。
アカシヤの花は、衣をつけ油で揚げると仄かな香りをもつ乙な季節の食べものになる。

糖餠糕 玫瑰餅
藤蘿餅
蒜苗炒肉絲

また滿人たちは、楡の實や薔薇の花びら・藤の花などを麥粉と砂糖を加へ團子にして、それぞれ楡饅糕・玫瑰餅・藤蘿餅などとよんで食べるが、ちよつと風流のやうで實は不味い代用食でしかあり得ない。たゞ、蒜の葉と絲切りの豚肉を炒めた蒜苗炒肉絲は季節の食べ物としては秀逸であらう。

赤大根 赤蕪
青豌豆
青皮蘿蔔

季節の野菜も内地と別して變りはなく、赤大根や赤蕪・青豌豆などが特に目立つ。
中でも、皮の青い芋のやうな形をした大根は青皮蘿蔔といつて、滿人

は果物がはりに盛に賞味する。これは肉質が硬く、紅色または紫色をしてゐて、程よい甘味と辛味があつて果物のやうに生食してなか／＼美味なものである。よく町の辻などで、西瓜のやうに縦に四切れぐらゐに削き、水を含ませた草蓆で濕しながら、臺に載せて賣つてゐるのを見かけろ。それは見たところ花のやうに美しい。

南滿洲では六月一日から警察官や學生生徒たちが夏服に着更へ、日傘や日傘、サンダルを穿いた乙女等が目につくやうになり、現地産の苺や櫻桃が市場に姿をあらはす。

六月八日には旅順の白玉山納骨祠で盛大な招魂祭が催され、奉納相撲や餘興、銃劍術、弓道競技等があつて數萬の日滿人が參詣して非常な賑ひを呈する。

六月十日の時の記念日のころにはポーナスの噂が街頭で囁かれ、夏の大賣出しに盆燈籠や團扇、扇子等も登場する。そして月末ごろになると

時の記念日
ポーナス 團扇
扇子

夏服 日傘
日傘 サンダル

七月 合歡



東京大相撲の満洲巡業が傳へられ、青少年義勇隊や勤勞奉仕隊が相ついで大連港に上陸しては滿鐵の列車で北滿の沃野に向つて雄々しく進發してゆく。

盛夏

七月は満洲の盛夏である。

満洲各地の一年中の平均気温を通過して見ると、海洋に臨んだ旅順大連地方を除いて、他は概して七月が最も高い。

大正八年七月二十三日に北満洲濱洲線（哈爾濱—滿洲里間）沿線の札蘭屯で四二度六といふ、日本では絶対に観測されたことのないやうな最高温を示した。南満洲の鄭家屯でも大正九年七月一日に三九度八の高温が観測されたことがある。これは夏季大陸旋風が興安嶺を越え北満洲の平原に下降してくる時に起る熱風、即ちフェーン（風炎）のもたらす炎暑である。

主要都市の平均湿度も七月が最高を示してゐる。それは内地のやうに六月に梅雨季がないかはりに、七月と八月の兩月が満洲の雨季に當るためであつて、降雨の最も烈しいのは七月末のやうである。

ベ・カ・ベダリヨフ氏によれば「北満洲は熱帯に位しないとはいへ、

熱風 フェーン
風炎 炎暑

雨季

降雨

その雨量の分布は極めて不均等で、すなはち四月乃至十月の暖い數月は平均年降雨量の九六・五%強、冬の數月は僅かに三・五%となつてゐる。また「松花江全流域の降雨量は多年の資料によれば五月一日乃至八月三十一日に四二〇・二耗で、同期間の嫩江流域に於ける降雨量は三三二・五耗、第二松花江流域に於ける降雨量は四八八耗、そのうち三六%は一年中の最も雨の多い七月に當ることを示してゐる」とある。

康徳七年（昭和十五年）時憲書によつて滿洲四大都市の年降雨量（單位ミリ）と七・八月中の降雨量とを比較對照して見ても亦次のやうな比率が現れる。

地名	年降水量	七・八月降水量	同百分比
新 京	六六〇・九	三二五・四	四八%
哈 爾 濱	五八七・六	三五一・〇	四三%
奉 天	六八一・八	三六六・三	四六%
大 連	五九八・四	二七五・五	四八%

つまり、年降雨量に於て我が國の二分ノ一か三分ノ一ぐらゐりしかない満洲ではあるが、その約半分が、この二ヶ月の間に降つてしまふわけである。

それに、猛烈な時には、僅か一日のうちに年降水量の三〇%、内外の降雨を見ることさへある。

現に、大正三年七月廿八日哈爾濱二七%、大正九年七月十六日大連三〇%、旅順二九%、昭和七年七月廿六日齊々哈爾三〇%といふふうに、それ／＼一日のうちに降つてしまつた豪雨の記録がある。

南滿洲の豪雨は、主として、稀に襲來する颱風と共に起るものであるが、北滿洲平原地方のものは「低氣壓性降雨」といはれ、雷や電光を伴ひ、短時間に驚くべき大雨を降らすものである。

そのため北滿洲では、往々にしてこの猛烈な驟雨のため鐵道路路盤が洗ひ流されたり、小さな鐵橋が破壊されたりして一時列車の通行が杜絶す

るやうなことも尠くない。

滿洲で最も雨量が多いのは鮮滿國境の山岳地帯であつて、安奉線沿線の鳳凰城の年平均降水量は九五三ミリに上る。だが、それさへ東京に比ぶれば僅かにその六〇%にしか當らないが、東部滿洲から次第に西部の蒙古地方に偏するにつれて雨量は次第に少くなり、滿洲里や海拉爾、赤峰等は二五〇ミリ内外しかない。

七・八月の候に雨が多いのは、このころ海上を渡つて滿洲平原地方に吹いてくる南西の風が、東部滿洲の山岳に遮られて起る上昇氣流によるものとされ、北滿洲平原の「低氣壓性降雨」に對し、東部の山岳地帯から南部の沿海地方のものは「地形性降雨」であるとされてゐる。面白いことは、日本内地の地形性降雨の雨量は沿海地方ほど多いと見られてゐるのに對し、滿洲では海岸との距離に關係なく、むしろ海拔高度に比例するといはれ、沿海都市よりも内陸都市の方が雨量が多く、この傾向は

海から六百軒も離れた奥地にまで及んでゐるのである。

この、七・八月の豪雨は、滿洲の氣象上の特徴として知られ、明治卅七八年の日露戦役の時にも、雨季の到らぬ前に作戦を効果的に進捗せしめようと非常に苦心したことが戦史にも傳はつてゐるが、「時は八月末つ方」と歌はれた遼陽會戦の最中に、この豪雨に遭遇して非常に苦戦したものである。

また昭和七年七月、馬占山軍追撃の皇軍が、泥濘に悩まされ「どこまでつづくぬかるみぞ、三日二夜を食もなく、雨ふりしぶく饑兒」の軍歌を生んだことはまた吾々の記憶に新しいところである。

殊に、當年七月の北滿洲の降雨は例年に見ぬ劇烈なもので、多年平均の七月の降雨量に對し、哈爾濱三三六%、齊々哈爾三三四%、札蘭屯三五三%、海拉爾三二二%、滿洲里四一九%といふやうに、三倍乃至四倍といふ降雨量を示し北滿洲の大動脈をなす松花江の最高水位は一三四・

泥濘 ぬかるみ
ふりしぶく

雷

大暑

生草の採集

三一米といふ未曾有の増水を來して哈爾濱市の、人口三十萬を擁する傳家甸市街は全く浸水するといふ洪水騒ぎを惹起したのであつた。

豪雨の先ばらひのやうにして雹が降ることも少くない。その雹も直径三纏もあらうといふ大きな氷球で折から白い水仙のやうな花をつけた馬鈴薯など雹に見まはれたが最後一度に參つてしまふ。

併しながら、滿洲の農家では、たいてい陽曆七月二十三日頃の大暑のころまでに、三大作物といはれる大豆・高粱・谷子(粟)をはじめ包米(玉蜀黍) 其他穀類・豆類等の除草・中耕・培土等を終り、大暑と立秋の間に小麦の收穫をするほかは陽曆九月八日頃の白露までの間は、ほとんど耕作の仕事はなく、住居の壁や温突、煙筒等の修理とか生草の採集等をやるのが例である。

つまり、七・八月の雨季には長い日照時數と、多雨とを齎らす天惠的氣候條件に信頼して、ひたすら作物の生育を待つばかりなのである。

高黍

霖雨

旱害

また實際に、この前後の作物の發育は目ざましいもので、文豪森鷗外も日露戦争の陣中で書いた「うた日記」に、七月二十五日古家子を發すとて、

高黍の一日一尺のびのびて畑は林となりけるかな。

たかむらは、古葉もあらん、高黍の、緑にならぶ、緑あらめや。

と、高粱の旺盛な成長ぶりと、緑の美しさを歌つてゐる。

まことに、この霖雨こそは、滿洲の農業にとつて、天與の慈雨ではあるが、それが度を過ぎて多雨となれば小麦等は銹病を發生したり、或は洪水を招來する虞れがあり、反對に、雨がなければ旱害をうけて農作物全滅の悲運を嘗めなくてはならぬ。

俗説によれば陰曆五月十三日と六月廿八日と七月七日には多少とも雨があるものださうである。それらの日が陽曆七、八月の雨季と符合してゐることは興味あることであり、支那や滿洲ではこの三つの日を雨節と稱

大雨

日乞ひ

照る／＼坊主

掃晴娘

紫姑神

張紫姑

雨漏り

んでゐるといふ。なほ舊五月十三日は、名將關羽が、彼を暗殺せんとした魯肅の招宴に臨み武威を以て遂に對手を壓伏して事なきを得た日として、各寺廟でお祭りなどが執行されるものたさうである。

さて、ままならぬは浮世の習はしとて、旱魃や大雨ともなれば、滿人の農民たちは、雨乞ひや日乞ひをするほか爲すところを知らないのである。

雨乞ひのことは六月の項で述べた通り、かなり大仕掛であるが、日乞ひはそれほどもなく、我が國の照る／＼坊主のやうに、掃晴娘といふ女の子を象つた人形を軒に吊すといつた程度らしい。

永尾龍造氏の「滿洲支那の習俗」によれば、掃晴娘は一名紫姑神とよばれる女神で、俗世に在したころは、張紫姑といふ貧しい老父母と、三人暮しの孝女であつたといふ。或る年、大雨がつづいて畠の作物は腐つてしまひさうになり、それに紫姑の家では雨漏りがひどく今にも倒壊し

さうになつた。ところが紫姑は、天の啓示でもうけたのか、一日箒を持つて外に出、雨に濡れるのはいとはず口に「撥雲見日」つまり「雲をはらつて日を見せて」と唱へながら空の雲を掃くやうな仕草をすると、不思議にも今までの豪雨は見る見るうちにやんでしまひ、やがて太陽の光が燦爛と地に照り映え、附近の農民もほつと愁眉をひらいたのであつた。その代り紫姑は、雨にうたれたのがもとで病氣となり、遂に不歸の客となつてしまつたのである。そこで村人たちは、彼女の功德に奉謝し、且つは孝女の心を憐れんで紫姑を神様として祠を建て、遣された老母の面倒を懇ろに見てやつた。

かうした因縁から、今でも日乞ひをする時には掃晴娘の人形を軒にぶらさげて雨がやむのを待つ習はしである。さて、その人形は布や紙でつくるのであるが、形は一定せず中には、女學生の姿をしてゐる掃晴娘もあるといふことである。だが、どんな恰好をしてゐようと、その手に箒

を持つてゐることだけはどの人形も同じである。そして、人形の頭には十五才以下の少女の手で箒を通し、「掃晴娘名は張さん、お天道さんに讃められて、一掃きすれば雨が止み、二た掃きすればお日が出る」と唱へながら軒に吊すのだといふ。この人形は風に吹かれると、その片手に持つた箒も、恰度空を掃くやうに共に揺れるので、雨雲はきれいさつぱりと拂拭されるといふ趣向である。

雨に因んだ行事として、六月十八日は雨の神様である龍王の誕生日とされ、農家や漁家等水に關係の深い業者や井戸のある家等では龍王を祀つて焼香する。

また六月廿四日に雷祖の誕生日といふので、城隍廟のあるところでは、その境内の一部に祀つてある雷祖殿に参詣する。元來支那や滿洲では、雷を男性と見て雷公とよび、電は女性として電母といつてゐるらしい。面白いことは、雷公はきまつて悪業を重ねた者の家に落ちるといふ迷信

雷祖神

雷公公晴男

落雷

があるので、脛に傷持つ連中は御機嫌をとるために雷祖神にお詣りし、また自分は善人であると信じてゐる人でも「ワイルドイコシヤ醉雷公晴男」といつて「ヒドレひどれ雷公の落ち損ね」といふ諺などがあるところから、過つて落雷を食つては大變といふので、雷公によく覚えてゐてもらはうとお詣りするおめでたい連中もあるといふ。

虹

雨の霽れ間には虹もかゝる。北満洲では、雨が降るときまつて気温が

灼けつく

降つて秋雨のやうな感じをうけるが、雨のない日は灼けつくやうな晴天

天胎節

であつて、さすがに七月は夏の盛りに違ひない。それで舊六月六日は天

土用干し

胎節といつて我が國の土用干しの日に當る。この日は晴天であることが

蟲干し 猫狗浴

喜ばれ、曝書や着物の蟲干しなどをやるほか「六月六猫狗浴」とか「洗

洗書

書」とかいつて猫や犬・馬・豚・羊等を河などに曳いていつて洗つてやる。

精霊流し

在滿日本人の間では、内地と同じく十三日から盂蘭盆で、佛教徒の家では、それ／＼法會に參詣するとか法事をするとかするほか、ホウレイダマシ精霊流し

土用の丑の日

鰻

などもする。併し、折角の床しい精霊流しながら、心ない滿人たちのために、ものの一問も流れてゆかぬ間に船は覆へされ、お供物は彼等のために争奪されるのが例である。

どこまでも日本式の生活を延長せねばやまない在滿日本人たちは、土用の丑の日にはやはり鰻を食はねば気が済まぬらしい。滿洲にも鰻がないことはないが、多くは内地や朝鮮方面から長途輸送されて來るもので、この日、日本人のゐる都市では鰻屋が繁昌する。數年前、まだ鐵道もついてゐなかつた佳木斯の町で「生きた鰻あり」と立看板を出した日本人の店を見かけ、またその鮮魚店で、目が白くなつて伸びてゐる死んだ鰻を賣つてゐるのを見て日本人の鰻に對する執着に吃驚したことがある。

土用

土用王事

いふまでもなく、土用鰻を食べる夏の土用は立秋前十八日で、滿洲國の時憲書には土用王事として記載され、滿洲國でも盛夏を意味する。暑

暑中見舞 三伏
初伏 中伏 二伏
末伏

替園子 三伏晒替

酷暑

花胡瓜

小菜 汗瓜子

江豆 綿豆 芹菜
杏仁 青椒 蕪芽

中見舞などに書かれる「三伏」は、初伏中伏（二伏）、末伏の總稱で、初伏は六月廿一日頃の夏至から數へて第三の庚、中伏は第四の庚の日で、陽曆ではそれぞれ七月十六日、同廿六日頃に當りいづれも時憲書に載つてゐる。

替園子（漬物屋）の看板によく「三伏晒替」などと書いてある。これは酷暑の候につくつた味噌といふ意味で、この時期のものが最も上等らしい。

満洲はおろか支那全土に知られてゐる錦州の花胡瓜の漬物ができるのも、やはりこのころである。三百年の歴史をもつてゐる錦州名物として知られ、満人の間では「小菜」「汗瓜子」とよばれる。鹽と蝦の油で漬けこんだもので花胡瓜のほかには江豆（蠶豆）・芹菜・杏仁・青椒・蕪芽などを調合する。

農村などで野天に約一間半四方に幕張りした中で豆油ランプともいふ

油燈 影繪芝居

農閑期

茶館 評書

影戲

驢皮影 驢皮影兒

驢皮影戲

影繪人形 影人

佈影

草墊子

夏の夜

べき油燈から盛んに黒煙をあげながら、やはり農民で組織した一座が影繪芝居を興行するのも夏の農閑期である。

都會では喫茶店と寄席をかねた茶社（茶館）などで、晝は評書（講談のやうなもの）をやり、夜になると影繪芝居即ち影戲をやる。

影戲はまた「驢皮影」とか「驢皮影兒」「驢皮影戲」などといはれる。これは影戲に用ひられる一尺ばかりの影繪人形（影人）や舞臺の大小道具（佈影）が驢馬の皮や羊皮を叩きのばして切抜き、赤・黒・青三色に稀に茶色を加へ彩色したその上に桐油を塗つてつくつたものだからである。

映寫幕は縦二尺、横一丈ぐらゐつて、多い時には騎馬や歩行の影人が十人ばかりも登場できる。観客たちは草墊子といふ草で編んだ圓座を床几に敷き、それにかけて給仕がついでくれる茶をのみながら夏の夜を娛しむといふわけである。

樂屋の方はスクリーンの下にその幅と同じ車子が置いてある。これを後臺カウズといつて、影人をその上に立たせスクリーンにびつたりくつつけるやうにするのである。光源は百燭光一つで、人形使カクシひカクシ（拿人手）を中心カクシにその助をつとめるかたはら臺詞をやる者二人、胡弓をひく者一人、大鑼・太鼓・鉦・笛・懸板兒等の樂器を扱ふ者三人都合七人ぐらゐる者が肩をつき合はせるやうにして熱演する。

特に臺詞をつかふ者だけでなく、他の五人も臺本シヤク（戲詞）を見ながら、それぞれ臺詞の受け渡しをしたり、喉に手を當てて高いつくり聲も出せば時には歌もうたふ。

影人は手・足・腰の部分を絲でとめ折曲げられるやうになつてゐて、頭部など役柄により差しかへることもできる。顔は支那芝居のそのやうに限取りで、武將・文官・善人・悪人の區別が一目でわかるやうになつてゐる。皆横向になつてゐて、扁平にできてはゐるが、使ひ様によつ

て立體感もでる。馬に乗つた武將が、朱房のついた槍を風車のやうに振り廻す場面などなかくに妙技を演ずる。

それは、兩の手首に針金がついてゐてその下に更に八寸ばかりの葦の柄があつて、それで手を動かし、仕草をさせるやうになつてゐる。背景をなす樹木や樓閣などもあり、見たところいづれも煤けて汚いが一度光を浴びると、赤・青・黒と地色の茶色が生彩を放ち、それが哀切な歌聲や十種に近い樂器の伴奏によつて觀客を夢の世界に誘ひ入れてゆく。

それは恰も我が文樂の人形芝居にも比すべきもので、日に衰微してゆく姿もまことによく似通つてゐる。現在、奉天や營口、時には新京、大連などで見られる。

夏の夕方など、日本の曬白を半分ハーフに輪切にしたやうなものを、車のやうに丸太棒の兩端に嵌めこんだものを振りまはす極めて曲のない力技をやつてゐる大道力士もある。胡弓を賣りあるく賣胡琴カクシ的が奉天北市場あ

賣水的

たりをうろついでゐるのもこのころである。
水の悪い土地に育つたせゐるか満人は決して生水を呑まない。そして、暑い時ほど舌の焦げさうな熱い茶を井のやうな茶碗になみ／＼とついでのむのが好きらしい。

茶壺

路傍に茶碗一杯一錢か二錢かでお茶を賣つてゐる賣水的といふ呑氣な商賣もある。

綠蔭 喝茶

夕景になると、土瓶(茶壺)持參で話相手を訪ねてゆくものもあれば、路傍の綠蔭に圓陣をつくつて喝茶のひとときを楽しんでゐる苦力たちもある。茶壺も陶器のもの、錫などの金屬を用ひたものなど色々あるが、苦力たちは、たいてい圓錐形のブリキ製のものを使つてゐる。これは洋鐵壺といつて、湯がさめないやうに外から蒲團でくるんだりしてゐる。念の入つたのになると、木箱に入れ、注ぎ口と柄だけが箱の外にのぞいてゐるのがある。とにかく、盛夏の候に茶を受用すること一通りではな

洋鐵壺

水壺

い。しかもそれが多くは道端での喝茶である。

賣開水的

街角の駄菓子屋など片手間に大きなサモワールのやうな湯沸し(水壺)を据ゑ、蒸氣でピーピー笛をならしてゐる。これを賣開水的といふ。必要に應じて、洋鐵壺一杯一二錢でお湯を賣つてゐるわけである。

蓮池

蓮池に蓮の花が咲き、睡蓮などもないわけではないが、北京などのやうに、池のほとりに茶店があつて上流の子女が喫茶してゐるやうな風景は滿洲ではあまり接しない。

合歡

夏の合歡の花の美しさは日本では逆も見られないと思ふ。紅色の葉の穂を集めたやうな花が、夕づくほどに舞ひやうに葉をたゞんでしまふ梢を覆ふやうに咲きほこつて、いよ／＼紅さが冴えてゆくのは何ともいへない。

- 月見草 石竹
- 姫百合 山丹
- すげゆり 鬼ゆり

道邊では月見草が咲き、野山には石竹が紅い。野生の姫百合(山丹)くるまゆり・すげゆり・鬼ゆりも咲く。

東郷草

蒙古櫻

ノモンハン櫻

萬年草 不死の草

水蜜桃 李

大連附近の海岸だけに咲くものと考へられてゐた東郷草が、蒙古の草原にも多いことが近ごろになつて判つた。この花は東郷大將が愛されたといふのでこの稱がある。ちよつと見ると淡紫色の女郎花といった風に見えるが、よく見ると米粒大の櫻花の集合體といった形である。それで蒙古櫻・ノモンハン櫻の異名がある。花は貝殼草のやうにガラ／＼してゐて乾燥に強く、葉は殆ど見られず、水なしで一年ぐらゐはもてる。海拉爾あたりで萬年草といつてゐるのはそのため、不死の草ともいはれるといふ。

大輪のダリヤが咲くのと前後して、遼東半島地方では果樹園産の水蜜桃や野生の李が季節の果物として市場に出る。

七月一日から八月下旬にかけて、満鐵では大連市民の健康増進のため旅順支線の夏家灣子海水浴場行の臨時列車を運轉し、その他大連郊外の星ヶ浦・鹽ヶ浦・傅家庄・旅順黃金臺・滿鐵連京沿線の沙崗・蓋平・奉天

海水浴

ビーチパラソル

天日鹽 鹽漬み

風車

釣魚

銷夏

貸ボート

本番着 日焼け

川開き

山沿線蘆葦島・興城・山海關南海の海水浴場等も相次いで開かれ、海岸にはビーチパラソルの花が咲く。また、遼東の渤海沿岸地方の鹽田はこの頃が天日鹽生産の書入れ時で鹽漬みの風車が帆をかけてくるくる廻つてゐるのが見られる。

滿洲奥地の海に遠い地方の人たちは薄濁つた川ながら、釣魚や水浴に銷夏するが、殊にロシア人の多い哈爾濱では松花江が夏のパラダイスとなつてゐる。ヨットクラブの下から對岸のザトンや太陽島には絶えず渡し船や貸ボートで往來し、太陽島の貸別荘は大入滿員の盛況である。江畔のレストランなど遊び好きなロシア人で一杯となり、江邊には濁つた江水とは凡そ似つかぬ華美な水浴着に小麦色に日焼けした肌をのぞかせた金髪のロシア女たちが、色眼鏡などをかけ、歐米人氣取りで嬉戲してゐるのを見かける。

この哈爾濱松花江の川開きはヘルピン市制實施記念日の七月一日夜九

火技

時から江上の中州(太陽島)で舉行されるが、滿洲建國後、同地觀光協會主催で兩國の花火にあやかつて仕掛花火を打上げることになつてゐる。そして、江岸に集まつた在住日本人はもちろん、滿人や露人市民たちに傳統的な我が國獨特の火技を堪能させてゐるが、今では哈爾濱名物の一つとなつてゐる。

ヨハヌの誕生日

クバリスキーの歌

七月七日はキリストの洗禮を行つたブレドチエーチヤ・ヨハヌの誕生日で、信徒たちはクバリスキーの歌をうたひ、娘たちは花冠をつくり、青年たちは燃えてゐる火の上を跳びこすといふ。

聖使徒の祭

カザン聖母像の祭

七月十二日はビョートル・ペウエル聖使徒の祭、廿一日はカザン聖母像の祭である。

この頃になるとヘルピン市街を走つてゐる露人のダクシーなどフェンダの頭に青葉をつけた小枝などを挿してゐるのをよく見る。沈鬱な冬に傷めつけられて來た哈爾濱人士が、木々の緑や、陽光を満喫できる夏を如何

啓蒙の日

ロマノフ忌

チエホフ忌

プーザ クワス

立飲み

に有難くいとほしんでゐるかを思ふと誠に涙が出るくらゐである。

舊曆七月十五日、つまり陽曆七月二十八日は、西曆九八八年に自らキリスト教に歸依し、今日ロシアをギリシヤ正教國にした端緒を開いた聖ウラヂミル公の命日である。一九二九年末ベルグラード市に於ける在外ロシア正教宗務會議はこの日を全ロシアの教會の民間祭日と定め、博愛・啓蒙の日として祝賀することとした。

七月十六日と十七日は露國最後の皇帝ニコラス二世一家がウラル山麓のエカテリンブルグ(スヴェルドロフスク)に於て赤衛軍のため悲惨な最期を遂げられた日である。白系露人たちは當日、華やかなりし帝政の日を偲び、敬虔な哀悼の意を表する。ロマノフ忌ともいふべきか。また七月二日はロシアの文豪チエホフの命日で北滿洲ヘルピン在住の俳人たちのあひだでチエホフ忌が修せられる。

街角にはプーザとかクワスとかロシア獨特の飲料の立飲みが見られ、

一面被ビール
 ビヤホール
 パラライカ 公園
 涼を求める
 氷屋 餡水 餡水
 シロップ 氷瑛皮
 氷糖 氷糖

下南

一面被^{イニニ}ビールのビヤホールでは露人樂師のパラライカの演奏をきき、乍ら和氣^{ワキ}舞^{マユ}の民族協和風景が展開される。

また、満人たちは好んで夜の公園に蟬集して涼を求めるが、満人街では、日本の田舎町のやうに屋臺店の氷屋さんがあつて、餡でかいた餡水^{アンゼ}（餡水）に果實のシロップをかけたのを賣つてゐるし、ハイカラな方ではアイスクリーム（氷瑛皮・氷糖）なども賣つてをり、最近ではアイスケーキ（氷棍）が斷然人氣を集めてゐる。

この頃になると満人の大好物である甜瓜がぼつ／＼市中に出てくる。不潔なことをそれほど気にやまぬ満人たちは、それを度ぐるみ種ぐるみ食べるので、我々日本人は側で眺めてハラ／＼するが、その割合に傳染病に罹患する者は案外少い。クリステイ^{クリステイ}氏の「華天三十年」の中にも甜瓜をたぐたぐの満人も皆下痢してゐるのに本人たちは案外平氣であるのに目を眩つたことが記されてゐたと思ふが、満人と雜居する日本人の

赤痢 疫痢

アミーバ赤痢

消化器病の罹病数は六、七、八月が非常に多い。滿鐵保健當局の發表によれば、コレラ・チフス・パラチフス・赤痢・疫痢等の消化器傳染病の約八割を占め、その半数が赤痢、四分一が腸チフスで、在滿日本内地人の罹患数は、腸チフスに於て日本の六倍・赤痢は十五倍といふ驚くべき數字を示してゐる。殊に、北滿地方の赤痢は頑固なアミーバ赤痢が多く、流行期間は先づ赤痢が六、七、八月に猖獗し、チフスは主として、九月、十一月の候に猛威を逞しうする。

それで、各市の衛生當局では豫防注射や野菜、果物等のクロールカルキ消毒等を奨励し、生食を禁ずるので、滿洲の夏は刺身やあらひ、酢の物等を賞味する機会には恵まれ難い。これら傳染病の媒介をするのは蠅であるが、蠅の物産さは内地では想像もつかぬほどであつて、森鷗外の陣中の「うた日記」の「かりやのなごり」（七月二十五日）の一節に、

昆より、糞雲涌きぬ

拂子
網戸
蚊

ひたと来て、身にまつはるや縫目なき、ひとへ黒衣
そは蠅なりき

——とある。よくく蠅には憎まされたと見える。

——そして「八月十九日於張家園子」に次の句がある。
秋近く蠅死すと日記に特筆す

滿人町では馬尾毛でつくつた蠅はたきの拂子が賣出されるが、關外にも「拂子糞」なる詩がある。

このやうに五月蠅い蠅を防ぐために、日本人の家の二重窓の内側の窓は夏になれば金網を張つた網戸に換へられるのである。

蠅につく蠅はれ者は内地では蚊であるが、滿洲では蚊は存外に少い。

その代りに猛毒を持つ蠅が濕つた石の下とか支那家屋の壁の隙間などから知ひ出して、お尻の槍で人間を刺すことがある。殊に、體色の青味を帯びた雄の蠅の毒は最も強烈で、蛇蝎の如く忌み嫌ふなどといふ言葉も

南京蟲 床蟲

屬蟲

蚊

ミンミン

糞ころがし

糞蟲 蚊蠅

屎蠅 スカラベ

あながち空言ではない。蚤は内地ほどにはゐないがその代り南京蟲(床蟲・屬蟲)は一流のホテルですら時々發見されるぐらゐ横行してゐる。

北滿洲では此の大群が飛舞のやうに飛び交つてゐるところがあり、ひどい時には交通が杜絶し、牛馬を食ひ殺すことさへあるといふ。

蠅は殆ど見えないが、旅順・大連地方に限つてミンミンが啼く。このミンミンは内地のものとも異なり、翅の附根が白いのでワキジロミンと呼ばれてゐる。炎土の野原に多く見られるのは「昆蟲記」でおなじみの糞ころがしである。

滿洲支那では、古來よほど注意されてゐる蟲と見え、糞蟲・蚊蠅・蚊・轉丸・弄丸・推丸・推車客・黒牛兒・鐵甲將軍・夢遊將軍の異名がある。一名屎蠅といはれるのはエジプト語のスカラベから轉訛したものとはいはれてゐる。

「金魚えい・きんぎょう」と滿人が呼賣りして歩くのもやはり暑い時であ

蛤蟆頭魚
龍睛球魚
絨球魚
鱧魚

鮎

鮎

る。元來支那人は金魚が好きで、蛤蟆頭魚とか龍睛球魚、絨球魚、鱧魚といふやうな變種も多いが、街頭に出廻るのは、先づ普通のものである。

滿洲にも鮎がとれる、といへば櫻が咲くと言はれた時のやうに嬉しい氣がするが、實際に、關東州と滿洲國との境界の邊りを流れる碧流河とか、山海關の石河等には鮎がゐることが立證されてゐる。日本人が滿洲に入り込むやうになると、櫻を植ゑなければ氣がすまないやうに、川にも鮎がゐないと氣がすまないのか、昭和十五年四月に近江の琵琶湖から遙々吉林まで鮎の稚魚二萬二千五百尾を輸入し、それを京圖線天崗驛附近を流れる松花江上流の牡牛河に放流したことがある。そして七月十五日を以てその漁獲を解禁したが、八月中旬吉林附近で釣れた鮎は體長十七、八釐目方七十瓦にも成長し、一尾二圓位の市價を生んだものである。鮎が棲む吉林松花江で、鮎飼が行はれることも今では衆知の事實である。

る。

滿洲産の鮎は、日本の鮎に比べて稍々頸が短いただけで形の上では大差ないが、内地の鮎が専ら夜間活躍するのに對し滿洲の鮎は白晝の活躍を得意とする。それだけ篝火などを焚く風情はなく、又絲をつけて操ることをするものでもなく、魚を叩へた鮎は滿人の鮎匠に手際よく長柄の網いタマで船上にすくひ上げられて魚を吐き出すといふ具合である。

松花江系の嫩江・雅兒河・牡丹江・横道河その他鴨綠江・綏河・太子河・運河・松樹河・熊岳河・大凌河等でも水浴や釣魚が盛んに行はれ、太子河下り等、夏の景物となつてゐる。

國際觀光局等でも哈爾濱・吉林・鏡泊湖・溫泉寺・連山關・橋頭等の河畔や湖畔をはじめ興城や山海關の海濱にサンマーハウスを設け鐵道沿線の湯崗子・熊岳城・五龍背・溫泉寺・興城・ハロンアルシヤン等の溫泉地に銷夏のひとときを送る人も多い。

サンマーハウス
溫泉

鮎

避暑

満洲線の札蘭屯や巴林等は、興安嶺の高原地に在る「北滿の輕井澤」として知られる避暑地で、ロシアの舊帝政時代にはロシア本國から避暑客がやつて来たほどで、ロシア人避暑客のほか、最近まで香港、上海、天津方面から、各國の居留外人數百名がこの地で夏を送るのを例としてゐた。

馬乳

札蘭屯は、馬乳による結核療養所なども置かれた保養地でもあり、その背後地は今に文化の光に浴したこともないオロチヨン人が昔ながらの狩獵生活を送つてゐるといふ原始林地帯であつて、山間の溪流には鮭のやうに巨大なクイメンや川紅鱒、レノーク、ハリウスなどといふ川魚がふんだんに釣られるばかりでなく、黒雷島、蝦夷松島、リヤープカといったやうな珍鳥や猪、鹿等が群生してゐて、天然の狩獵リンクをなしてゐる。

外蒙古との國境に近く哈爾哈河に注ぐアルシヤン河畔のハロン・アル

クイメン 紅鱒

レノーク

ハリウス

黒雷島 蝦夷松島

冷泉

シヤンは蒙古語で「熱い甘露」の意で、温泉の湧く蒙古高原中の一聖地であるが、こゝにも一九二六年（大正十五年）の如きは舊北滿沿線や上海天津方面に在留のロシア人一千七百人のほか、内蒙古やザバイカル地方から三千數百人の蒙古人たちが入浴のためにやつて来た。なにしろ、この地は冷泉・温泉を併せて四十四個の石疊の浴槽はあるが、いづれも野天の下にあるので、浴客が集まるのは五月から九月であつて、盛夏の候が最も多い。蒙古人たちはこの温泉を神聖視し、決して素裸で入浴せず、入浴中も「オムマニ・バトモアホン」と咒文を唱へながら合掌するといふ風である。そして、冷泉に棲む魚に餌をやるばかりでなく、浴槽の石に巢喰ふ蛇に危害を加へたり附近で狩獵すること等を禁じ、浴槽で石疊を使ふことすら致してないのである。現在ではこの地まで白温線が敷設され、滿鐵經營の近代的なホテルも設けられてゐる。

夏と山とはすぐにも聯想されるところであるが、滿洲には四時雪を戴

白色地帯

鎮成

夏休

いてゐる山としては朝鮮國境の白頭山を描いて他になく、例年夏になる
とこの白色地帯に探検隊が繰り出すものである。その他醫巫間山・千山・
鐵刹山は滿洲の三靈山として知られ山中に佛教や、道教の寺、觀が營ま
れてゐるが、五龍山・鳳凰山・摩天嶺・拉法砬子・大和尚山・小黑山等
も名山の稱がある。

鎮成の夏だけに、例年七月初旬に大連市では伝統的な實滿野球戦（滿
鐵の滿洲俱樂部對實業團）が開催されてゐたが、近來優勝チームが内地の
都市對抗野球戦に出場の都合上六月に行はれ、その代り七月から八月に
かけ職業野球團の滿洲リーグ戦が連京沿線の大都市で舉行され、それと
前後して東京大相撲も滿洲の沿線大都市を巡業する。

在滿教務部では今年から、初等學校の夏休を鎮成の意を含めて七月二
十一日より八月四日まで十五日間に短縮し、その代り冬休みを三十五日
間にした。

蓮花燈



八月



七月を峠にして、暑さも八月に入ると漸次下り坂となる。

それでも、六月よりは暑く、場所によつては最高極氣温など七月を凌ぐことすらある。併し、概して八月の暑さは残暑以上に出づるものではない。北寄りの満洲里、海拉爾、免渡河のやうなところでは、年により最低極氣温が零度以下に下ることがあり、北滿洲では、日中は堪へられぬほどの暑さであつても、夜は晩秋のやうに冷氣を覚える。

そして雨季も終末に近づかうといふ八月下旬にもなれば、南北滿洲の間はず新秋の氣が漲りわたる。

滿洲の民謡の一節に「夏雨甲子乗船入市」といふのがある。「夏の甲子きょうしに雨が降りや、市にお船が乗入れる。」といふ意味である。夏の甲子はたいてい陽曆の七月下旬であるが、この頃の雨は洪水を呼ぶといふのである。

八月の降水量や降水日数は、七月に比して稍々少くはあるが、滿洲で

最も洪水が多いのは七月よりも八月なので、この民謡も案外嘘ではないやうな氣もする。

由來、滿洲の大きな河川は、降雨によつて培養され、夏期に満水する河型に屬し、六、七、八月の雨季になると、直ぐその降雨量を反映して、概ね八月半ばに最高水位を示すものである。

もつとも例外がないではなく、一九一六年（大正五年）の松花江の最高水位は六月二十九日、一九二八年（昭和三年）は九月二十四、五日であつたこともあるが、これまでに記録に残るほどの洪水を起した明治四十二年、同四十三年、大正三年、同十二年、昭和四年、同七年の松花江の水位は、大正十二年の九月一日を除いて、他はいづれも八月十二日乃至二十九日に最高に達してゐる。

昭和七年の松花江の大氾濫だいはんらんによる洪水の時には、八月十二日に海面一三四・三二米といふ未曾有の高水位を示し、そのため北滿洲の廣大な地

域が浸水して、耕地は荒廢し道路や橋梁建物を流失したほか、流域村落は跡形もなくなり、數十萬の住民が家と食とを失つた。哈爾濱市でも、傳家甸の滿人街や商業域である道裡が水浸しとなつて、三十萬の罹災者を出したことは、また世人の記憶に新しいところである。

クリスタイー氏の「奉天三十年」には、明治二十一年の奉天附近の大洪水の状況が、誠に手にとる如く記載されてゐるので、冗長を厭はず左に引用することにする。

——二週間といふものは止みなく土砂降りに降り續いた。山間地方に洪水があるといふ陰氣な噂が廣まり始め、河の水嵩が次第々々に増すのを見て人々は頭を振つた。八月十三日に雨は止んだ。併しその夜遅く我の病院及び住宅の前の小河沿の水が、多くの人が興奮して見る間に徐ろに上り始めた。翌早朝「水が上る！ 水が上る」と戸外で人の叫ぶのが聞えた。

私が出て見ると、家の前の土堤は人だかりがして、それと川との間は完全に浸水してゐた。きら／＼と朝日を受けて漣を立ててゐる靜かな流の中に、突然逆巻く怒濤が押し寄せた。それが引いたあと水は一呎高くなつてゐた。又一浪押し寄せ—又急に高くなる—又—又とう／＼我々の高臺を洗ふ迄になつた。三時間に十五呎増水したのである。

全體どうしたことだらう。

その夜の間に山間地方から出た大量の水が道々破壊を逞しくしつつ、運河の流域を下つて來たのである。村又村が一掃され、或る村の如きは避難を語るべき一人の生残者もなかつた。或る村では兩腕で材木につかまつて十哩も押し流された女が唯一の生残者であつた。奉天の上流約十五哩の處に一の小村落があるが、ここでは水が甚だ急に増したため高地に避難する暇がなく、家といふ家は悉く崩壊し、屋内の人々は暗闇の中で落ちた壁の上に集り、生きた思ひもなかつた。その夜と翌日、彼等は浸

れた家にしがみついていた。水は腰に來、腋の下に來、食物は手に入らなかつた。遂に夕方になつて洪水が退き始めたが、十一人の者は行方不明となつた。

その中にも奔流は滔々として進行し、遂に奉天の東約二哩の地點、大きな材木置場と村落のある處で、運河の堤防が決潰した。大量の水は河の水路を離れ、人家の多い低地一面を浸水しながら、一浪又一浪、小河沿の方向に押しよせたのである。

我々の門前の静かな緩い流は、今や深く逆巻く急流となつた。向うは見渡す限り怒濤の海となり、此處彼處に樹の頭だけが見えて、多くの男女がその枝にしがみついて居る。我々の家の前を材木置場の丸太や、高粱の束や、木やテーブルや、荷車が流れて行く。それから馬や騾馬や牛や犬や、既に濡れて死んだもの、死ぬまいと跳くもの。それから人間が壊れた破片にしがみつぎ、或は急持への筏にたかつて流れて來た。水は

まだ増しつゝあつた。我々の家の高臺は島となつて、病院との連絡が全く絶えた。間のところでは水は數呎の深さがあり、我々の屋敷内は全部浸水し、住宅の床上にも水が浸いた。屋敷の東側の壁は流れてしまひ、門裏屋の一部は崩潰し、轎やその他の所有品が我々の見て居る前で急流に流されて行つた。遂に午後四時頃増水が止んで、初めてホツとした。いつもの水面より二十呎も高く上つたのであつた。

水勢が猛烈なため、濡れかかつた人々に多くの助けを與へることは不可能であつたが、我々は出来るだけの力を盡して數人の生命を救つた。環を結び付けた繩を投げて、濡れかかつた人を一人ならず助けた。六人の人を載せた粗末な筏をば、この方法で安全に病院の門へ引きよせることが出來た。(中略)

この洪水によつて失はれた生命を推定することは不可能である。また水に呑まれた村々の外に、奉天郊外の大部分は浸水し、數百の人が濡れ

た。財産は更に大であり、多くの家族が安楽な生活から赤貧に落ちた。滿洲全土に亘つて河川が氾濫したため、災害の範囲は廣くあつた云々——北滿洲では、四月から十月までの暖い七ヶ月に、年雨量の九六・五%を降つてしまふといふやうな雨量の分布の不均等といふことが、七月・八月豪雨の後、かうした洪水の惨劇を生むものであつて、滿洲の小さな川は、夏だけ水が流れ、その他の時は河床を露出して、冬など農産物積出の道路と化すやうな状態なのである。

洪水の被害は、決して絨上のやうな直接のものだけでなく、その後に来る災害はもつと大きい。即ち、農作物の全滅による「飢饉は熱病を従者として」嚴寒期となつてから更に多数の罹災民の上へのしかかつて来るのである。

家もなく食もなくなつた農民は、洪水によつて出来た池や沼や水溜りにわいた蚊軍の媒介によつて、翌春早々マラリヤ熱の蔓延に攻められて

れなければならぬ。そして、「全地方が繁榮を回復する迄に數年を要する」といふ大きな痛手を受ける。

併し、多雨も、早魃も陰曆七月十五日、つまり陽曆八月中旬ごろから先は大して作物に影響はないものと見え、「七月十五旱不澇。八月十五定收成。」——七月半から降らうとまよ。八月半は作定め——とか「梗子じょうし暑不出頭。趕到老秋割喂牛。」——處暑に梗稻の穂が出なけりや、秋の末には牛の餌え（滿洲事情案内所譯）——といふやうな民論がある。處暑といへば二十四氣の中で陽曆八月廿三、四日ごろに當る。

とにかく、滿洲の雨は、農作物生育の全盛期である六・七・八月の三箇月間に集中されてゐるので、農業上必要とする年雨量五〇〇耗以下の地でも有利に農作することができるので、雨の順調な平年ならば、たいてい舊七月十五日ごろから處暑の頃にかけて、稻も穂を出し他の穀物も殆ど生長を遂げてゐるのが先づ普通である。

豊作
凶作

豊作

立秋

草刈り アンペラ
編み 土煉瓦造り
土壁

満洲では大豆と高粱と粟を三大作物として、その作付面積も廣大であるが、高粱と粟は熱帯性植物の特徴として暑ければ暑いほど豊作であるのに對して、大豆は反對に氣温が低く降水量が多い年が豊作であるといふ矛盾がある。それで、高粱や粟が豊作の時には大豆は凶作であるといふことになるから、奉天から新京附近一帯の中満洲ともいふべき地方の農家では、この三大作物を各二分に分けて作付し、大豆・高粱・粟の順に三年輪作して、氣象の影響から来る饑饉を免れるやうにしてゐる。

農民たちは、作物が成長を遂げた舊七月十五日から後の氣象に對しては運を天にまかせ、陽曆七月二十三、四日の大暑から八月八日の立秋までの間に麥の收穫を終つてその運搬、調整をするほかは野良仕事も一段落をつける。そして八・九月には、主として自家の土壁や炕・煙突などの泥塗りや草刈、アンペラ編み、土煉瓦造りなどをやる。

土煉瓦は土壁といつて、一般農家建築の重要な材料で、他に木材があ

土壁

打壁

れば、すぐにも家が建つといふ調法なものである。この土壁には製造法によつて脱壁と打壁がある。

脱壁は、窪地から泥をとつて來て草を切込み、長さ三七纏、幅一九纏、厚さ七纏といふ煉瓦より稍々大形の木枠に詰めて形を造り、それを日光に曝して固めるのである。満洲の泥は、粘土様であるしそれにアルカリ分が強いとなほさら堅固なものができる。

打壁は泥の代りに濕つた粘土を枠木に押込んで天日で乾かしたもので、脱壁よりも大形のものや、色々の變り形のものを作ることができるといふ特徴がある。

これらの土壁は、農舎をつくる場合煉瓦代用とするもので、その製法が簡單なだけ、我が開拓地でもどん／＼自家用として造つてゐる。大して手間がかからないので、必要に應じ一日平均三百個から四百個を造ることができるといふ。

圍壁 砲塔

泥塔 土塀

土塔

砲臺

銃眼 砲眼

滿洲の地方農村ともいふべき屯とか鎮とかと稱する部落は、都城市の煉瓦だたみの城壁の代りに、圍壁(ウラベ)といふ圍ひの中にある。その目的は城壁と同じく兵匪の災厄を防ぐためであつて、多くは土で固めた正方形の土塀である。

また個人の家でも、土塔又は泥塔(ニイタ)といふ土塀で圍つてあるものが多い。富裕の家になればなるほどこの土塀を高くすることは勿論であつて、厚さは一米内外で高さは二米から三米にも及ぶ。

この土塔(トウ)の造り方は種々あるが、先づ大型の土煉瓦を積上げてその上を粘土で固めるか、或は粘土だけで固めてゆくものもある。

土塔を築き、大や鷲鳥など口喧しい番兵を置いても、また安心できない豪農の家では塀を高くした上にその四隅に土蔵に似た砲臺を設けてゐる。その高さは塀よりも高く約五米あり、幅は四米内外である。三方に銃眼がついてゐて、いざ匪襲となれば、備ひ人たちが、二階になつてゐ

砲臺 砲眼

馬賊 匪賊

阿片 鴉片 罂粟

罂粟

るその砲臺の階上に梯子で上り、そこから直滅法に發砲するのである。數名一團の散匪程度なら、鐵砲の音がすれば敬遠して近づかないので、砲臺は陣容を示し、銃は音がする程度で結構であつて、大匪團が襲來した時には空々交戦して死守するといつたやうなことはなく、たいてい和議してしまふものである。

滿洲建國前には、俗に馬賊といはれた滿洲名物の匪賊は、高粱が伸びきつて、人馬を没するやうになる七・八月の候に大いに跳梁したものである。いふまでもなく、それは逃げたり隠れたりするに都合よい状態になるためであることは申すまでもないが、今一つの理由は、恰度この時分阿片(アヘン)の原料である罂粟(マカ)(芥子)の花が咲き、それが實を結んで、その割葉(ワタ)が始まるからである。元來吉林、熱河地方の山間僻地では、官憲の目を偷んで罂粟の密栽培をするものが多かつたので、馬賊たちは自然その弱點につけこみ、農民を官憲の壓迫から護衛してやるといふ事に

藉口し、その代償として農民から利益の分け前を奪ひ、或は、その利益を奪掠してゐたのである。

阿片そのものは、罌粟の半熟の果殻に傷をつけそこから流れ出る乳液を固めたもので、その乳液の採集は花盛りから半月ばかりたつて、まだ青い芥子坊主が粉を吹き下方の蓋れ目が薄黒く色づくころが最好の時季とされてゐる。だから、たいてい七・八月の候に行はれるのが普通であつて、日盛りを見て、果實に西瓜の縞のやうに縦に通つてゐる隆起部を下の方か頭の方に向けて一回に三四條づつ安全剃刀の刃のやうなもので薄く切傷をつけ、三分ほどして乳液が十分溢み出た時、竹筒のやうなもので掻取つて茶碗などに容れる。この切傷は隔日に行ひ、隆起部がすんだら窪んだところにも切傷をつけるといふ風に三四回ばかりやつてやめる。宵切朝掻きといつて夕刻切傷をつけ、翌日早朝露の乾かぬ間に掻取る方法もあり、これは第三回後の採集に行ふことが多いといふ。

満洲建國後、漸次治安が確立したので、建國當年（昭和七年）の高粱葉茂期に於て二十三萬に達した匪賊も漸次影をひそめ、さすがの満洲名物も今日では僅か一千人ぐらゐになつてしまつた。

また、各省警務廳に於ても、阿片の禁煙に關する事項を管掌することとなり阿片禁煙者の消極的絶滅を期しやはり建國當年十一月に阿片法の公布を見た。

馬賊が横行するといふこの季節に、しほらしくも藁の中では、きりぎりす、こほろぎ、鈴蟲が鳴く。また七月ごろから蟻姑の鳴聲もきくことができるし、夜は大きな螢も飛び交ふ。

満人はキリギリスが好きらしい。中でもキークキークーと高聲に鳴くシナキリギリスを愛し、高粱稈で細工したピラミッド型の籠に入れて飼ふ。満洲朝鮮に分布してゐる種類はオニキリギリス又はコベネオホキリギリスといふ翅が小さくて翔べない團體の大きい褐色の不恰好なボテギ

雑穀
 雑穀
 雑穀
 赤地千里
 かまきり
 ばつた

スとでもいひさうな代物である。雄はジューと一本調子に鳴き、ジ・ジ・ジ・ジ・ジと、雌でも短いながら鳴くことができるので有名である。

満洲や支那では、洪水の時には蝦が繁殖し、旱魃の時には蝗が多分に発生すると考へられてゐる。滿鐵十年史によれば明治三十九年と四十年の晩夏から初秋にかけて旅順支線や瓦房附近に無数の蝗が発生して沿線の高梁や粟の穂や葉を食ひつくし、何哩といふあひだ線路の上をこの蝗の大群が匍匐前進して軌條面を蔽ひ、その上を列車が通るまではよいが、潰された蝗のため車輪が空轉して列車を停止させてしまはねばならぬといふ有様なので、やむなく機關車の前に手箒をしばりつけて軌條面の塵群を拂ひのけながら列車を運行したことが記されてゐる。

交通事故ばかりでなく、蝗害により作物が食ひ荒されることは早害にも比すべく、そのため赤地千里を現出することも少くない。

その他、かまきりやばつた、蜻蛉なども少くない。

西瓜 甜瓜 越瓜
 胡瓜 南瓜 冬瓜
 絲瓜 瓠子 胡蘆
 トマト 蕃茄 茄子
 蕃椒 甜菜
 日向葵 轉日輪
 星座

南滿洲では八月の初獵から田鴨撃ちがはじまり、渤海沿岸の遼瀋な海では身がばつちりはいつた大きな蟹が大量にとれる。

朝顔や風仙花（透骨草・指甲草）が咲き、新鮮な地元産西瓜・甜瓜・越瓜・胡瓜・南瓜・冬瓜・絲瓜、栢杓等の器物にする瓠子、蟋蟀を飼ふ容器とする胡蘆（へうたん）、其他トマト（蕃茄）、茄子、青い蕃椒等季節の野菜が出盛る。

北滿洲方面では甜菜（さとう大根・ビート）が栽培され滿洲の製糖會社に原料を供給してゐる。

日向葵（轉日輪）は温暖な氣候を好むが全滿各地で見られる。栽培されるまでにはいつてゐないが製油原料等として用途が廣い。その子實は含油分が多く、滿人や露人の子供たちは瓜子兒の代用として好んで喰ひ、雨季のあとをうけて空は澄みわたり星座のたたずまひもはつきりしてくる。

琴座 鶯座

牽牛星 銀河

天河 明河 天津

天漢 七夕

雲霧建織

織女 牽牛

陰曆の七月七日には琴座の織女星と鶯座の牽牛星の二つが天の河（銀河・天河・明河・天津・天漢）を中にして頭上に見えるやうになる。それに上絃の月が天河の下流にかかるので、さうした天體の配置が、床しい七夕の傳説を生んだものらしい。

この神仙的な物語りは支那の戰國時代から秦晉時代に起つたものといはれる。その女主人公である織女は、天帝の娘で、一心に雲霧建織の衣を織りなし、天象自然の現象に辛苦を積んで来たが、天帝は織女の努力を賞で、また一つには獨身の彼女を慰めるために川向うの牽牛といふ婿をとつてめあはせることにした。ところが織女は牽牛との愛の生活に入つて以來機織りをしなくなつたので、天界物象に支障を來たすやうになつた。それでは困る、といふので、天帝は織女に因果を含め、一年一度だけ牽牛との逢ふ瀬を許すことにしたといふのである。

その一年にたつた一度の面會日が舊七月七日であつて、それも晴れた

喜劇

七月七 七巧節

七巧

乞巧 丟針兒

針占ひ

日に限られてゐる。もちろん天が曇り、雨が降つては星を見るすべもないが、七夕に雨がなければ、せつかく牽牛が天の河を越して彼岸に渡れるやうにと喜劇が羽をつらねてこしらへてくれた情の機織も、天河の氾濫のために流れてしまつて、逢ふことができない。

しかも、一年にたつた一度の大事な舊七月七日は、滿洲では五月十三日、六月廿八日と共に雨節の日に當り、どんな早魃な年でも、その日は多かれ少かれ雨が降ると言ひ傳へられてゐる。

この哀戀の物語りは、さすがに婦女子の同情を惹くものと見え「七夕」「七月七」「七巧節」又は單に「七巧」ともいつて、七月七日は女の子たちは織女にあやかつて裁縫や機織りなどが上達するやうにと祈る行事がおこなはれる。これを「乞巧」といふ。當夜、女の子は丟針兒（針占ひ）といつて、お椀に水を満たし水面に毛のやうに細い刺繡用の針を浮かべ椀の底に映る影が細いか疎大であるかによつて針仕事の上達するか否か

を占ふ。

今日、満洲に在住する日本内地人の間には、郷里でやるやうな笹に五色の短冊を下けるといつた七夕風習は全く見られないが、厳格な満人の家庭では、丟針見のほか、家族一同庭に出てお菓子や季節の果物を賞味し、星を眺めて牛郎と織女の傳説を偲ぶ。

家庭的な行事がないまでも、満洲の諸都市では、七夕の前後、牛郎と織女の悲戀を仕組んだ「天河配」といふ、ちよつと我が三保の松原の傳説に似た筋の歌劇を上演する。この劇は、有名な支那四大名優の隨一たる梅蘭芳の得意中の得意である。

● 舊七月十五日は、満洲でも、地獄の釜の蓋も開くといふ例の盂蘭盆の日として中元節又は鬼節といつて十三日ごろから準備をはじめ、十五日には佛教寺院や道教の寺でも盂蘭盆會を執行するし、陽曆四月初旬の清明節や舊十月一日の寒衣節の時と同じく墓参日となつてゐる。

牛郎

天河配

盂蘭盆

中元節

中元

お盆 お中元

焚船

鬼官 鬼判官

鬼兵 鬼卒

焼法船

支那や満洲では、一年を三元と見て、舊一月十五日を上元、同七月十五日を中元、十月十五日を下元としてゐるが、上元と中元をそれ／＼元宵節、中元節として重視してゐるのに對し、下元にはほとんど行事らしい行事はやつてゐない。

我が國では、七月十五日のお盆に「お中元」といつて贈答の習はしがあるが、満洲では中元節には贈答はしない。贈答品のやりとりが行はれるのは端午節と中秋節と年關（年越し）の時との三度である。

中元節に贈答をしないとはいへそれは現世の人と贈答をしないだけのこと、死者に對して贈りものをすると思たがよからう。

當日、各寺院では、高粱稗を骨組にした大きい紙船を造りそれにやはり紙でつくつた鬼官、鬼判官、鬼兵、鬼卒、僧侶を象つた人形を載せその船を境内に安置して供養の讀經をした後、河や池に浮かべて焼いてしまふ。この行事は焼法船といつて、ちよつと我が國の精霊流しに似てゐる。

放河燈
蓮花燈

鬼節
祭掃

精進料理

イリヤの祭

變貌祭

る。大連のやうな商業都市になると、繁昌してゐる商家とか、肉屋又は魚屋の掌櫃が施主となつて、この行事を盛大にやる。

その他、放河燈といつて、桃色の紙でつくつた造花の蓮の花を板にのせた蓮花燈に蠟燭を點し、それに柄をつけて子供たちが町中を持ち廻つたする、河に浮かべて流してやる。我が燈籠流しや送り火の風習と同巧異曲の習はしであるが、ふつう七月十五日を以てこれら中元節の行事を終り、十六日には持ち越さない。

満洲の農村では、七月十五日を俗に鬼節といつて亡霊を祀り祖先の墳墓を祭掃する日としてゐることは他と變りはないが、地方により休業する所もあり、しない所もあつて一定しない。併し多くは、晝食の時に（飯子俗に豚饅頭）御馳走を出し、別に精進料理などはしないやうである。

なほロシヤ人の八月の行事としては、航空の神なる機師者イリヤの祭日があり、陽曆八月十九日はキリスト變貌祭（アレオスフゼーニエ・ガスガ

マリヤ昇天祭

ートニエ）同八月廿八日は聖母マリヤ昇天祭といふ一大祭日がある。

キリスト變貌祭には、もう新しい穀物を抜取つて食べてもよいものとされてゐるといふことである。また聖母昇天祭當日は、ヘルビンのギリシヤ正教寺院などでは大法會があり、一日中町は森閑としてひっそりと暮れてゆく。

月 九



月 餅



二十四節氣からいへば「霜降」は陽曆十月二十三、四日頃に當る。

併し實際はそれよりもずつと早く、興安嶺方面など例年八月下旬に初霜を見るが、大體に於て九月中旬からぼつ／＼各地で初霜が始まり、大連の暖治節前後を殿りに南北滿洲の各地とも初霜の洗禮をうけてしまふ。

終霜期は通常四、五の兩月間なので、無霜期間は先づ三ヶ月乃至五ヶ月位といふことになる。つまりこの期間内だけ農作ができるので一毛作しかできないが、幸ひなことに本期間中に限つて速度の雨量があり、多期南滿洲に比して寒氣の厳しい北滿洲が却つて氣温が高く且つ日照時間が長いうへに内地に比べて快晴日數が多いのであるから、農業上天恵的好條件を具有してゐるわけである。現在可耕地面積の約半分しか耕作されてゐない滿洲が、世界的農業國として知られてゐるのも要するにかうした氣候上の恩恵に浴してゐるためであることは言ふまでもない。

七月を峠にして徐々に下り坂となつた平均氣温も、九月には各地とも

外農

結實 雨季明け

乾燥 脱穀

看紅米 看收成

玉蜀黍 包米

白薯 大豆 粟

谷子 刈入れ

秋分 收穫

殆ど十度臺を保持してゐるが、奉天以北の地に在つては、最低極氣温は早くも零度以下を示すやうになる。

それで、夏中屋外で外寝してゐた滿人農民たちも舊八月十五日の中秋節がすむと、屋内で臥床せざるを得なくなる。

この急激な寒氣の襲來は、作物の結實を早めるのに役立つばかりでなく、雨季明けの快晴つづきと高燥な新秋の大氣とは收穫物の乾燥や脱穀其他の處理上非常に好都合なのである。

七月十五看紅米。八月十五看收成。——陰曆七月十五日ごろには高粱が稔り、一ヶ月後にはみな收穫されてしまふ、といふのであるが、陽曆八月下旬「處暑」がすむと間もなく玉蜀黍（包米）の刈入れを始め、陽曆九月八日の白露ごろには大豆、粟（谷子）を、またそれより少しおくられて高粱の刈入れに着手する。そして、早くは秋分までに、おそくも九月一ばいにはたいいていの收穫を終るのである。

白露

開拓地

豊年踊り

大麥 小麥

赤小豆 早熟

瓜子兒

やきまび

新穀

白露要割地。秋分無生田。

「陽曆九月八日の白露にはとりいれだ。廿四日の秋分には畑に何も無い。」と歌にさへ歌はれてゐる。我が開拓地でも九月には殆ど刈入れを終りお國自慢の民謡を歌つて豊年踊りをするところもある。

平常の年には、舊八月十五日の中秋節直前になると遼陽・海城地方に大麥、小麥等の新穀や豌豆等が出盛り、また新京に近い范家屯・公主嶺・郭家店・四平街の滿鐵沿線都市に赤小豆等の早熟豆類が出廻る。一方、蒙古地方の洮南・通遼あたりには、支那人の好む瓜子兒の原料である西瓜の種子を買附のため北京・天津をはじめ遠くは廣東方面から遙々商人が出張して活躍を開始する。そして町には早くも「やきまび」の香ばしい匂ひがながれる。

中秋節を前にして市況がかくも活況を呈するのは、中秋節の入用品買入れの資金獲得のため、農民が新穀を賣念ぐためであるが、穀物の成熟

中秋節 八月節

團圓節 中秋

秋の半 爽涼 月

月宮

天高く 馬肥ゆ

穂波 實り

のちそい地方の農民たちは、取引先の糧棧から糧金の前借をして間に合はせる風がある。

中秋節は民間の三大節の一であつて八月節又は團圓節とも言はれてゐる。「中秋とは秋の半を紀するなり、晝夜に依りて平分、時候此に至りて爽涼となる。夫れ月は日を借りて以て光となすも中秋に至りて更にその皎を増す」といはれ、陰曆八月十五日は月宮の誕生日とされ、秋の真中の日とされてゐる。

時は天高く馬肥ゆる大陸の好季節であるばかりでなく、風調雨順の恵みをうけて高粱や粟の穂波が天際に連なる豊かな實りの秋である。農家では、過去數ヶ月のあひだ苦勞して育てて來た甲斐あつて恰度新穀や豆類の取入れに一息入れる時であるだけに、中秋節は豊年祭ともいふべき祭典である。それだけに農家としてはしちほちちおいても盛大に祝ひたいところである。眞に「鰲を飛ばし、壘を傳へ、笑語融々として頗る賑や

か」なる佳節にちがひないが、その半面、詩聖李太白が「舉頭望明月。低頭思故郷。」と歌ひ、清の吳船山歌に「月子彎々照九州。幾家歡樂幾家愁。幾家夫婦同羅帳。幾箇飄零在外頭。」などと歌はれてゐるやうに、中秋の明月は懐ひを速く馳せるよすがともなるのである。

思へば、滿洲原住の蒙古人や滿洲旗人たちを除いて、總人口の九割餘を占める三千數百萬の漢人をはじめ日本内地人、半島人、ロシア人等、すべて僅々百年内外の間に移住して來た人々だけに、その感懐も特別深いものがあらねばならぬ。

例年、舊正月後、山東省や河北省方面から滿洲に出稼ぎにやつてくる苦力たちも、中秋節には郷里で月見をしようとする者が多い。これは中秋節がすむと滿洲は漸く結氷期に入り、戸外の勞働が出来なくなるためであるが、滿洲建國後は結氷中も建設の手を弛めることなく工事を進めてゐるのでこのころでは中秋節に歸國する者も少くなつた。それで

多くは北滿洲の工事現場の窩棚（獨立小屋）から明月を仰いで思郷のこころを遣るといふ有様である。

滿人の各家庭でも、たいていは院子（中庭）に毛氈など敷いてその上に跪き拜月するぐらゐのもので、供月といつて神位にお供へ物をして月宮を祀る儀式はだん／＼廢れて來て、僅かに豪農とか素封家等で見られるぐらゐになつた。

さうした家庭では、お正月の時と同じやうに、朝早く中庭に月光馬兒（月宮馬兒・月光馬・月亮馬兒）といふ神位を立て、その前に置いた卓子に月餅、酒、果物、季節の野菜などを供へて香爐で線香を焚き、紙錢を焼いて拜む。

夜になつて、八月十五夜の明月が中天にかかるころ、女たちは中庭に出て禮拜し、拜月をすませると同時に今度は月光馬兒を焼いてしまふ。舊十二月二十三夜の祭が「女不祭竈」といつて男だけで祭儀を執り

男不拜月

行ふのと反對に、この中秋節の儀式は「男不拜月」といつて女だけでやることになつてゐる。

併し、拜月がすんで月光馬兒を焼いてしまふと、お供物を全部下げ、そこで一家の者が打揃つて月見の宴を開くのである。中秋節のことを一名過團圓節グオチュワンユエチエなどといふのもこんなところに由来するのであらう。

とにかく中秋節は、何でも彼でも圓いものが喜ばれ、家族の者たちは月宮の誕生を祝し合ひながら、お供物の月餅や林檎・西瓜・甜瓜・柿・葡萄等の圓い果物などを食べる。

殊に林檎は滿洲語で蘋果ピングオ（苹果）などといはれ「平」の字と同音のところから「平安如意」の縁起物とされ、この夜はまだ特別に團圓節に因んだ團圓果トワンユワングオとして賞味される。

一説によれば、柿は「事」と同音なので「事々如意」、葡萄の「葡」は「普」と同音で「普天同慶」に通するので好んで供へるものだからで

過團圓節

林檎 柿

葡萄

蘋果 苹果

團圓果

果樹園

ある。

これらの果物は、柿を除き南滿洲方面の果樹園で栽培される現地産のものであつて、滿洲林檎の如きは、美味世界一の名譽を博してゐる。その栽培地は十二・一・二月の平均氣温零下一〇・五度の等温線を北限としてゐるので、大石橋以南の連京線沿線、安奉線沿線、奉山線の興城方面が栽培好適地とされ、九月に入れば熊岳城・普蘭店・三十里堡・金州等で驛賣がはじまり、秋の旅に趣きを添へる栽培品種は國光・紅玉・祝・倭錦・鶏冠・魁等である。稀に哈爾濱地方でも栽培されてゐるが、専ら加工用に充てるもので、生食には適しない。

葡萄は林檎に比し、その分布は幾分廣いといへ、ほぼ林檎と栽培區域を同じくし牛奶・瓊々・龍眼・白鷄心・紅鷄心・晚香玉等のほか玫瑰香（マスカットハンブルク）ブラックハンブルク、マスカットオブレヤチンドリア等の優良品をも産する。

秋の旅

生食

梨 紅梨 紅消梨
山梨 白梨

棗 山楂

糖漿

みさんどし

山棗紅

山棗紅 山棗紅

梨は、半野生のものを多く見かける。熊岳城の紅梨（紅消梨）、千山の山梨、醫巫閭山の白梨等は、特に名産として知られてゐる。栽培の北限は林檎より稍々南に偏するといへ、まづ葡萄等と殆ど同様地域に産する。

このほかに擧ぐべき果物としては棗、山楂、山葡萄等がある。

棗は「庭に一本棗の木」といふ例の水師警會見の歌で我が國人にも知られてゐる通り關東州内の旅順や金州近傍にその大木を見うける。滿洲や支那の棗の實はちよつと藪の大きさほどもあり、甘くて漿水も多く、生のまゝ食べても大變美味であるが、砂糖漬にした蜜棗や、燻棗等の加工品として賞味され、又月餅や元宵の餡などに用ひられる。

山楂は滿洲・北支の山地に多い樹木である。普通生食できる山楂は「みさんどし」といはれる種類で、山楂に接木して栽培したもので山棗紅、山棗紅、山梨紅などと名づけられてゐる。林檎を梅の實ぐらゐに縮小し

糖胡蘆
山楂糖

蜜餞海棠

山葡萄

葡萄酒

たやうな眞紅の果實で、酸味が強い。この實を四五個づつ串にさして餡をつけた冰糖胡蘆（糖胡蘆）の甘酸つばい風雅な味はひは、滿人各層の人々に愛されてゐる。また山楂の實を漬して羊羹のやうに固めた山楂糖は夏の食べものとして賞用されてゐる。

海棠の實が熟するものこのころである。北京などでは砂糖汁で煮て蜜餞海棠として賣出すといふが滿洲ではあまり見かけない。

山葡萄は滿洲東部の山岳地帯には到る處に産し、粒は小さく紫黒色で稍々滋味があるが却つて野趣があつて美味い。もとは、濱綏線や京圖線沿線の中間驛などに、附近の滿人やロシア人、半島人などの子供たちがもぎたての、まだ粉が白く吹いてゐる醵房かを自分の帽子に入れて賣りに出てゐて、退屈な旅情を慰めたものである。現在、安奉線の沿線地方や山岳地帯にある滿鐵の鐵道自警村などで山葡萄から生葡萄酒を醸造して賣出してゐるところがある。

兎公 莢豆

さて、中秋節の供物として供へられる季節の果物は、先づ以上のやうなものであるが、別に、月宮の兎公の食物として莢豆や鶏頭の花などを供へる家もある。

舊一月十五夜の元宵節には、我がお月見團子に似た元宵といふお粉團子のやうなものをお供へするが、八月十五夜の中秋節には太鼓焼に似た形の月餅といふ乾菓子をお供へる。この月餅は、中秋節には無くしてはならぬお菓子で、表皮の白いのや狐色の別によつて自來白自來紅などと呼ばれるものがあり、その他、表皮や餡等の種別により色々な名が冠せられ、その種類は實に百數十種に上る。またその大きさも小は直径二寸ぐらゐから大は二尺にも及ぶものがあり、その品質の優劣によつて價格にも高低がある。形は圓形に限られるが、デコレーションケーキのやうに表面に色々意装を加へられた贈答用の一個數十元といふやうな豪華な月餅もつくられてゐるが、近年さうしたものは漸次影をひそめてきた。

月餅

棗泥 胡桃 杏仁
落花生 菓子

餡も千差萬別で、日本式の小豆餡に似た澄沙とか、棗でつくつた棗泥といつたものをはじめ、山楂、青梅、松の實、胡桃、杏仁、落花生、菓子といったやうな果實とか、薔薇や木犀の花まであしらつたものがあり、また中には卵黄や腸詰まで刻みこんだ凝つた月餅もある。併し日本人の口にはあまり合はない。

中秋節の十日ばかり前から、菓子屋では、かねて店に藏つてある「中秋月餅」と書いた満月形の圓い看板を出す。木に浮彫したもの、硝子を張つて中に電球をとりつけたもの、さては無造作に紅紙を貼つて墨で中秋月餅と書いたものなどあるが、繪はきまつて兎が杵を持つて菓をつく月宮殿である。

神位の月光馬兒といふのは、我が國の風のやうに、四角又は長方形に高粱稈を骨として杵取りしたものに太陰星君の像や兎が杵で菓を搗いてゐる月宮殿を印刷した紙を貼りつけたもので、大きさは障子大のものも

高粱稈

月宮殿

満月

太陰星君

鬼見巻

あれば團扇ほどのもある。大きなものになると、壁に立てかけたりするが、小さなものは印刷した例の繪紙を高梁稗の上部を二つに裂いてその間に挟み、ちよつと軍配團扇のやうな恰好にして紅米などを入れた研の中心にそれを立てるのである。畫面の繪も、鬼と太陰星君だけでなく、玉皇大帝や風・雲・雷・雨を司る諸神まで描いたものがある。

北支那方面では、鬼見巻といふ耳長の、鬼公が人間のやうに衣冠をつけ唐獅子や花臺に鎮座した泥人形を買つて來て十三日夜から中庭に祀つてお供へするといふ風があるが、今日滿洲では、ほとんど鬼見巻を賣つてゐるのを見かけなくなつた。



嫦娥奔月 武家坡

捉放曹 文昭閣

オロチオン

棲林人

ボルカン

白酒 山刀

山男

そして、宵夜になると、七夕の夜に各地の劇場で、織女と牛郎の悲劇を仕組んだ「天河配」を一齊上演するやうに、應節戯として、明月に關聯ある「嫦娥奔月」「武家坡」「捉放曹」「文昭閣」といつたやうな芝居を上演する。

中秋節と年關と端午節は漢民族の三大節であるばかりでなく、嶺の山中にあつて今に昔ながらの狩獵生活を送つてゐるオロチオン民族も、この三大節を祝祭日としてゐる。

棲林人といはれてゐる彼等は、日ごろ三四戸づつ分れ／＼になつて、原始林の中を轉々と狩り暮してゐるのであるが、陰曆八月十五日には、各々食物と酒を携へて定められた山土に相集ひ、明月の下、狩獵の神ボルカンを祀つて神祕的な一大饗宴を張るのだといふ。俗界を遠く離れた山中に、ヤマタのオロチの如く白酒を呷り、酔へば必ず山刀を揮つて斬り合はすんばやますといふ鬪悍兇暴の山男たちの夜宴は思ふだに悽愴そ

のものである。

まだ蒙古呼倫貝爾草原の唯中、即ち今の興安北省新巴爾虎左翼旗に在る喇嘛教の寺院「甘珠爾廟」では、舊八月六日から十五日の中秋節にかけて十日のあひだ大法會を催し、それに附随して、廟の四面に擴がる天高く馬肥ゆる蒙古の野に年に一度の市が立ち、家畜の大取引が行はれるのである。

甘珠爾廟は約百六十年前に清の乾隆帝の勅諭により建立された支那式の大伽藍で、寺號を壽寧寺と謚された名刹である。蒙古人の間に甘珠爾廟といつて尊信されてゐるのは百八卷の有難い甘珠爾經が納められてゐるためであつて、今でもコロンバイル十二廟の總本山として多數の喇嘛僧が、この曠原の一字の廟で明け暮れ佛にかしづいてゐるのである。

この廟は、涯もない草原の中に、ぼつんと建てられてゐて、日頃は訪ふ人もないが、舊八月一日から五日までの五日間廟から北に一里ばかり

離れた地點で一大定期市が開かれるので、その時になると、遊牧の蒙古人數千は、牛車に組立式の天幕を積んでこの廟の附近に蟠集し、そこにお椀を伏せたやうな包（蒙古式のテント）を張つて約半月の間その地に滞留する。

この甘珠爾廟の定期市といふのは、長い冬の生活に入る蒙古人たちの家畜の手持ちを少くし、家畜を賣つた金で冬期の必需品を買ひ入れるといふ目的の下に、過去百年餘りの間つづけられてゐるものである。

市が立つのは舊八月一日から五日間であるが、最初の二日間で牛馬の取引をすませ、第三日目からは遠く山西・山東省方面や北支の北京・天津方面から出張して天幕を連ねた雜貨商や穀物商・呉服商・金物商等の店で一冬分の必需品や装具などを買込み、酒を飲み、賭博に興じ、支那料理に舌鼓を打ち、思ふ存分の歡をつくす。

五日間の市がはねると翌る六日から中秋節の十五日まで十日間、末寺

包

背經

秋風

秋丁 紀孔

秋祭

から集まつた數百の喇嘛僧を加へて甘珠爾廟で大法會がはじまるので、蒙古人たちは、やはり市の立つた場所に包を結んで参籠する。

そして、願ひごとのあるものは、重い甘珠爾經を背負つて本堂ソフシンスムの周圍をお百度を踏む。これは「背經」(メイジン)とよばれる行であるが、法會がはねると蒙古人たちは包を解き、吹き暮る秋風のままにそれ／＼家畜を追ひながら廣い草原の彼方に散つて行く。

陰曆八月上丁日、つまり舊八月に入つて第一のひのこの日は、秋丁紀孔といつて、孔子の秋祭の日に當る。王道滿洲國ではこの日を國家的祝祭日と定め、古例に則り毎年嚴かな典禮を執行するが、その實況は春丁紀孔の項で詳述したからここには重複を避け度い。ただ大同元年(建國當年・昭和七年)九月三日滿洲國では第一回の聖典を全國に執行し、翌年九月二十八日の秋丁には執政(現滿洲國皇帝)親臨して盛儀を執行されたことを附記しようと思ふ。

孔誕

本承認記念日

九月十八日

滿洲事變

航空記念日

なほ舊八月二十八日は孔子の誕生日であつて、お隣の中國では、民國二十三年から陽曆八月二十七日を孔誕の國定記念日と定め、毎年各地の文廟で陽曆によつて執行してゐる。

昭和七年九月十五日は、我が國が、四十二箇國の反對を物ともせず、國際聯盟の説退を請して敢然滿洲國を承認した日であつて、當日は「日本承認滿洲國記念日」として滿洲國記念日の一となつてゐるが、九月十八日は、昭和六年の當夜十時半奉天北郊の柳條溝附近に於ける支那正規兵の滿鐵線爆破によつて滿洲事變が勃發し、滿洲建國の動因をなした日として我が國の記念日となつてゐるのである。この二つの記念日は、我が國が東亞新秩序建設の大業に發足し、且つ巨歩を印した日として、日滿兩國人に牢記さるべき記念日であつて、九月十八日には全滿各地に建立されてゐる忠靈塔の招魂祭が執行される。なほ昭和十五年から九月二十八日が航空記念日と定められ當日關係當局では航空報國を唱導し一大

秋季大祭

航空ページェントなどを催す。

在滿各神社の春季大祭は五、六月の好季節に行はれるが、秋季大祭は爽涼の九、十月の候に執行されるものが多い。概して北滿洲各地は南滿洲の各地よりも早目に、九月中旬に大祭を執行する傾向が見られるやうである。九月中旬に大祭を行ふのを各地別に挙げると、四日遼陽、九日熊岳城・煙臺、十日郭家店・蓋平・蛟河、十四日新京、十五日奉天・鞍山・安東・四平街・齊々哈爾・百草溝・大虎山・鄭家屯、十七日普蘭店、十八日通遼堡、二十日昌圖・西安・綏中、二十一日新臺子、二十三日敦化、二十四日千山、二十五日金州・朝陽・溝帮子等の諸神社である。

とにかく九月は、滿洲では六月と共に最も快適な季節であることにちがひなく、秋の七草なども、内地ほどに種類を揃へることはできないとしても萩、尾花、撫子、藤袴、桔梗等はたいてい附近の山野で採集できるのである。

秋の七草

萩 尾花 撫子

藤袴 桔梗

秋深む

巻雲 霹靂

さなきだに温度の少い、すつきりした滿洲は、秋深むにつれ益々空気が清澄を加へ、蒙古の曠原地では綿を投げつけたやうな巻雲や、霹靂が紺青と白色の對比も鮮やかにくつきりと浮く日が多い。

甘珠爾湖の廟市が立つ蒙古地方は晝中は夏のやうに暑いが、夜は冬のやうに寒く、毛皮を纏はねば包の中で夜を明かすことはできない位で、時には雹が降ることさへある。

滿洲の夏は、内地と違つて雨季に當るので、土用干しなどには適しないが、九月は空気も乾燥し、晝間は相當日光が強いので曝書などもこの時分が合理的で、普通の家庭でもたいてい九月に蟲干しをし、夏の薄物や簾とか、レースのカーテン、扇風機といった眞夏用の家具什器をしまひ冬物の仕立替や手入れをする。

庭木の剪定をはじめめるのもこの時分で、哈爾濱あたりでは、防寒のためぼつ／＼庭木埋めの作業をはじめめる人がある。

庭木埋め

剪定

庭木埋め

二百十日
二百二十日
暴風雨

微熱

コレラ チブス

漁撈禁止

チヌ セイゴ

蟹

二百十日や二百二十日の暴風雨も、ほぼ内地並みに襲来することが多く、海のダイヤが狂ひがちになるものである。

冬の長い満洲では、東の間の夏しか持てないので、自然、夏期には異常な鍛錬生活を送ることになり勝ちとなり、そのため却つて微熱がとれなくなつたりすることが多い。

それに、コレラとかチブス等も秋口が最も蔓延の兆候が著しく、大連港や奉天・山海關等の關門では、華北・中支方面の流行地からくる疫病の侵入を食ひとめるため、檢便その他檢疫に大重となり、大連港内などはほとんど毎年のやうに港内の海水使用や漁撈禁止となる。

渤海沿岸の、殊に旅順方面に偏つた地方では三四寸ぐらゐのチヌやセイゴが釣れはじめ、太公望連の血を湧かす。メベル、アイナメ等の瀬魚や太刀魚等もこのころが盛漁期で、鱈・鮮・鯊等も釣れる。またやはり渤海沿岸の遼淺の海では、羣大の蟹がとれ、食慾の秋の味覺を楽しませ

小紫蟹

山の幸

初茸

鶉 アラジ ヒワ

マメマワシ

カシラ ヲノミ

かすみ網

ハイキング

鈴虫 松虫

る。殊に遼河畔の營口附近でとれる小紫蟹は滿人間に賞味され、詩人であり滿洲國最初の國務總理であつた鄭孝胥氏の如きは、詩文を通じてこの蟹を賞揚したといふ。

海の幸とともに山の幸も豊かで、八月末から九月にかけて南滿地方では初茸が頭をもたげる。

そして、九月半から十月にかけて鶉、アラジ、ヒワ、マメマワシ、カシラ等の小鳥が渡り、ツグミは十月一杯が好期とある。このころになれば、小鳥黨は朝七時から八時ごろにかけて水邊にかすみ網を張つて水の中に來る小鳥を待つ。

旅順附近に渡つてくる鶉の大群は有名なもので、全く旅大の人々を有頂天にしてしまふほど秋は山海の幸に恵まれる。

夏の鍛錬生活の締め括りとばかり、近郊へハイキングや戰蹟參觀に出かける人々も多く、草叢にすだくキリギリスや鈴虫、松虫、蟋蟀等の虫

赤い夕日

柞蠶 黄葉 柳

柞蠶 秋蠶

蟋蟀 蝸蝓 見

虫の聲

蟋蟀相撲

の音を聞き、満洲ならでは見られぬ赤い赤い夕日に照らされるのもこの時である。鳴かない虫では、てんとう虫がある。また遼東半島地方では世界的に名譽を馳せてゐる柞蠶が、折から黄葉しようといふ樹(かしは)梢(なら)柞(くぬぎ)等の柞樹に放飼される。製絲用に供されるのは秋蠶が主である。

滿人たちは、虫の中でも特に蟋蟀(蝸蝓見)を好む。そして、胡瓜や茄子で養ひ、蝸々胡蘆といふ瓢箪を細工した容れものに入れ懷中で温めて鳴かす。子供たちは、その瓢箪を抱いて寝、朝起きると蟋蟀を洗面器の中などに出して食べものを與へ、瓢箪の中をお湯で洗つて、又その容器にをさめ肌身につけて持つて歩く。北京の風流な貴婦人たちは、來客を接待する時も懷中にこの瓢箪を忍ばせ、體温にあたためられてゆく。なく鳴出す虫の聲に、お客を喜ばせるといふ。

また大の男たちは、二匹の蟋蟀を淺い壺のやうなものに入れて蟋蟀相撲

聖母降誕祭

十字架祭

白系露人

撲をやらせる。蟋蟀は闘争性が強いので、細い棒の先に馬の毛をつけたもので兩方をつついて鉢合はせさせると、猛烈な咬合ひをはじめるのである。見物人はその壺の底を覗きこんで聲援するのであるが、どちらか先に羽を擴げて悲鳴をあげた方が負けである。陽曆九月二十一日の聖母降誕祭と二十七日の聖十字架祭はギリシア正教の大祭日である。

聖十字架祭は、十字架發見の日を記念するもので、當夜正教寺院では祭壇から十字架を出して信者たちの前を持つてある。

なほ九月十一日は、キリストの洗禮を行つたヨハヌの受難日として備心ぶかい白系露人たちは當日お精進をすることにしてゐる。

十月 菊



初雪

十月に入れば最低気温は全滿各地を通じて全部零度以下に下り、國內都邑は、一二の例外を除き殆ど初雪に見舞はれる。

最高気温さへも、もはや三十度以上に出でることはなく、降水量も目立って減少し、快晴日數がめつきり多くなる。

つまり天高く馬肥ゆるといった、大陸特有の、すばんと突きぬけたやうな晴れ渡つた日がつづくわけであるが、月末には、すっかり冬の様相を見せてくる。

急激な寒氣の襲來のため、結實が促進され、早いところでは九月中旬に收穫を終るところもあるが、蒙古寄りの地では陽曆十月八、九日の「寒露」前後に野菜や蕎麥を收穫し、耕地に叉銃のやうに立て架けて晒らしておいた高粱を打場だちやうに取入れる。俗に「霜降要變天」といつて霜降のころには氣候ががらりと變る、といふので、十月二十三、四日の「霜降」までは遅くも收穫を終つてしまふ。

寒露
霜降
打場
蕎麥

二食

調整

不寝番
打更的

農繁期に一日四食を耕つたほどの農民も、蒙古寄りの地方では舊曆九月中旬ごろから二食となり、漸く農閑期に入る。また、かなり晩くまで農耕する南滿洲地方でも、先づ十二月から一月一ばいは一日二食となり播種期のころと同様の粗食をするものである。

とにかく、十月は、農家にとつて收穫と收穫物の脱穀・調整の時期と見るべきである。

滿洲の豪農の家では夜目のきく老人を特に不寝番（打更的）として雇ひ、この時季には一段と警戒を嚴重にする。

なにしろ南北に跨る廣大な滿洲のことであるから、收穫される農作物の種類も多いが、大體に於て、北支那に栽培されるものの延長といふことができる。併し、全然、同様といふのではなく、北支那が小麥の作付が壓倒的であるといふのに對して、滿洲は大豆と高粱、粟が三大作物となつて居るといふ工合であり、それも、南滿洲地方は特用作物と高粱、

玉蜀黍の作付歩合が高く、北滿洲は高温を必要とせぬ大豆が斷然主位を占めるといつた調子である。

しかも、滿洲農作物の中には、支那本土から流入した漢人のものは勿論のこと、日本人やロシア人が移植したものがかなり數多く織込まれてゐることも面白いことであつて、我が北滿開拓地で栽培してゐる水稻も北海道のハシリ坊主・坊主五號・六號・木の下糯等なのである。これら滿洲農作物も、要約すれば先づ次のやうに五大別することができる。

食用植物—高粱・粟・玉蜀黍・水稻・陸稻・小麥・大麥・燕麥・稗・黍・蕎麥

小豆・綠豆・菜豆・豌豆・豇豆

油料植物—大豆・荳蔻・蓖麻・胡麻・落花生・向日葵

纖維作物—棉花・大麻・亞麻・苧麻・洋麻(ケナフ)

其他特用作物—甜菜・烟草・苧布・罌粟

園藝作物—果樹・蔬菜

さて、これらの作物は、十月には殆ど收穫を終り、小麥の如きは早く

も八月末頃から市場に賣出され、十月には他の新穀も出廻り、翌年三月初ろまでに市場に搬出を終るが、新穀出廻りと同時に油房工業も俄然活氣づく。

穀類の搬出輸送が最も旺盛を極めるのは、十二月から一月にかけてである。それは、全滿の河川や道路がコンクリートのやうに凍結して車馬の運行に最も都合よくなるからであるが、十月には松花江上流の嫩江と黒龍江本流が流氷を開始するぐらゐるもので、北滿の河川は十一月にならなければ完全に結氷しない。

南流する南滿洲の遼河などは、十二月末から一月にかけて結氷する有様であるから、自然、出廻りはこの時期に持越されるわけである。

普通、黒龍江の航行日數は、一年に一五五日乃至二〇〇日であつて、一年の半分しか川は開いてゐないわけである。昭和十五年の黒河發金山嶺行の終航船は十月七日、哈爾濱行は十月十二日であつた。それ以後は

流水のため航行が全く不可能になり、河川航運に依存してゐた江岸都市は一時交通杜絶となるのである。

併し、流水が止まつて河面が全く堅氷に鎖される十二月頃になれば、河岸と河水上を縫ふやうにして鐵道總局バスの連絡運行が開始され、航運に代つて冬期の交通機關となる。従つて、滿洲の公共汽車（旅客車）即ちバス（巴斯）の營業路線は、冬期は夏期よりも長くなるわけである。それも、氷雪の上を行くのであるから、スリッパすることが多く、タイヤはチェーンを以て滑り止めとし、夏期には焼けてこまるラヂエーターや機關部には、冷却を防ぐため却つて毛皮のカヴァーを以て覆ふといふ有様である。

流水が始まると、これまで河川に浮かべられてゐた船舶は、みな江畔の入江に曳き込まれ、そこで結氷期を越すのである。國境河川の警備に當る滿洲國の江防艦隊所屬の軍艦さへ、艦底にローラーをつけ、岸邊に

曳き上げられ、そこで冬眠せねばならない。

雁や鴨の大群が、北へ渡つて行つたのは、春の、河の水がぼこぼこ割れて解氷する頃であつたが、北滿の河川が凍りつめようとして、氷塊が頻りに流下する十月に再び南に向つて渡つてゆく。

雁の群と大鴨の群は相交はるやうにして翔び過ぎてゆくが、波を打つて飛ぶ鴨の群は、或る時は黒煙がたなびくやうに、また或る時は砂塵を吹上げたやうに見え、その合ひ間を縫ふやうにして白鳥も飛び過ぎてゆく。白鳥は、春秋二回、雁鴨の隨行者として同行するのである。

低く鳴き交はしながら雁の群が次々に通つてゆくのを見かけるのは中秋節のころからで、獵人たちは沼明りを透かし、月光を背にして飛來する飛雁の群に撃ちかけるものである。

併し、雁鴨群は、晩秋の、朔北の風の吹き荒ぶ悪天候の時が最適の條件とされ、それも日中よりは、夕方の上げ撃ちが主であつて、一種獨

特の壯快なゲームである。

殊にその時季は、山鳴や鳴撃ちが一段落を告げ、雉子や山鶉には幾分早すぎるといふ頃合ひであるから、獵人たちは、わけて大物撃ちの連中は、好敵御参なれといはんばかりに手具懸引いて待ちまうけてゐるのである。

その獵場は、河畔とか沼の附近がよく、適當の場所に待機して頭上に被つてくるところを撃ちかけるか、落花生鳥を漁つてゐるところに巧みに近迫して浴せ撃ちにするのである。

初秋の風が朝夕肌に沁みるところともなれば、西北の風に乗つて、鶉と共に山鳴の大群が遼東半島突端の老鐵山の谿間に限りもなく飛來する。この老鐵山は、我が閉塞歐の壯舉で名高い旅順港口を扼する名山であるが、秋の山鳴撃ちは、世界的に知られた魅力あるゲームである。

また、春先、この山の附近で網で捕へた鷹の幼鳥を哺育したものが、

秋には、もう立派な成鳥となり、よく訓練されたものは兎や小鳥を捕へられるやうになり、一羽何十圓といふ高價で取引される。旅順附近では土民が山間に小屋掛けして、片足を長さ四米ぐらゐの網でつないで抗に結ひつけた四、五羽の鷹を使つて、その邊に迷ひ込んで來る兎を捕へて生計をたててゐる者がある。

秋の夜、大連の街角に賣りに出る鷹は、胸の斑點が横に走つてゐるものが、蒼鷹（ブルー・イーグル）又は「おぼたか」縦縞の方を狗鷹（ドッグ・イーグル）といふらしい。

鷹の漢名は鷂（イーグル）といひ、我が國の隼と同一のものであつて、蒙古地方では王公だけがこの鷹を馴らして兎や雉子の狩獵に用ひてゐるが、滿洲族人たちは、上下の區別なく鷹狩りを好んで雉子や小鳥を捕へさせる。その場合、鷹の頸に鈴や、空罐に小石を入れたものなどを付け、その所在を知るやうにしてゐる。食餌は豚肉や鶏肉又は小鳥の肉などなので、一日十錢もかかる關係上、無能な鷹は僅か數十錢で手離してしまふもので

ある。

鷹の一種で鶴といふのがある。遼史によれば、一名海東青と呼ぶとのことで、「華大彈丸の如く、俯して鳩鶴を撃つ」のださうである。「北人、二月、三月、鶴を放ち、海東青と號し、雁を打つ」ともある。二月三月とは舊曆であるから、春の解氷時の雁を狙ふのであらう。

清の高宗の詩に「海東青は羽族之最驚なる者、身小に而て健、其の飛ぶや極めて高く、能く天鵝を擒にし、兔を搏つ」云々とある。

また「海東青、從來其の巢を見ず」といふから、滿洲では巢を營ますシベリヤや沿海州方面で繁殖するものであらうと思ふ。

遼の第九代天祚帝は、遼西の名山と知られる醫巫闾山方面で鷹狩を事として政治を顧みず、偶々、今のソ領沿海州方面に、この狩獵に用ひる「海東青」なる鷹を産するので使臣を派遣したが、同地方に蟠踞する女真族の阿骨打なる酋長は、遼の使臣等が原住民を苦しめたといふので遼

軍に挑戰し、遂に遼を亡ぼして金國を建てたのだと史上に見えてゐる。いはば、遂は鷹「海東青」のために、國家を滅亡に導いたやうなものである。

秋の鷹狩りは昔から王侯將相の間に行はれたものと見え、唐詩選の中に「觀獵」と題し次のやうな五言律詩（王維作）が載つてゐる。

風勁うして角弓鳴り。

將軍涓域に獵す。

興枯れて鷹眼疾く。

雪盡きて馬蹄輕し。

忽ち新豐の市を過ぎて。

還た細柳の營に歸る。

鷹を射し處を回看すれば。

千里暮雲平かなり。

木蘭秋獵

卷狩り

哨鹿

行圍 鹿

清朝時代には、熱河の承德府界の北に木蘭圍場といふ周圍二百里餘りもある帝室の御獵場があつて、陰曆八月の候に木蘭行圍とか又は木蘭秋獵といつて、大々的な卷狩りが行はれてゐたといふ。

「木蘭」といふのは、滿洲の原語で「哨鹿」の義に當るのださうである。元來、木蘭圍場内には野猪、虎等の猛獸や、その他色々な禽獸が多く棲息してゐたが、中でも鹿が最も多かつた。従つて行圍（卷狩）も鹿を對象として行はれたものである。

その狩獵方法は、中秋以前は牝牡各々群をなしてゐるが、中秋以後は牝鹿が各々群を離れて自ら牡鹿を求める習性を利用したもので、獵者は木で哨子（笛）を作り、夜明けにそれを吹くのである。するとその唼々の聲を聞いて鹿群が集まつてくるので、そこを獵者が射て捕へるといふ趣向である。即ち、哨鹿といはれる所以であつて、秋分前後がその好期に當るため、木蘭秋獵と言はれたものらしい。

打圍

蒙古犬

獵場

なほ、この木蘭秋獵は、清朝の黄金時代ともいふべき康熙・乾隆・嘉慶帝時代、毎年或は隔年に行はれ、その時には蒙古内藩の王公、新附の酋長等を招待して盛大に舉行したといふ。この催しは、表面は士氣を壯にし古風を存せんが爲であるといはれてゐたらしいが、實は、その機會を利用して蒙古王公と意志の疏通を計り、蒙古を綏撫するのが目的であつたと見られる。なほ、この哨鹿の方法は現在興安嶺山中に住む狩獵民族オロチヨンの間で今も套襲されてゐるといふ。

現在でも蒙古地方では晩秋の候、旗の王公や旗長統率の下に各旗聯合の大規模な卷狩（打圍）が舉行されてゐる。

これは清朝時代からの遺風らしく、滿洲建國の今日ですら王公等は旗差物を押立て、古風な官服官帽に威儀を正し、官吏壯丁等もそれぞれ愛養の馬にまたがり頸輪に朱房をつけて威風を添へた蒙古犬數匹づつを隨へ、各旗分擔の場所に集まり、相互連絡して獵場を包圍し、渦巻形を描

獵犬

打棍子

狼 野猪

黄羊

旱獭 獐

野兔

熊 豹

狐

きながら包圍圈を縮少し、圍中に獵犬を放つて頻りに喚聲をあげる。

かくして奔命に疲れた野獸を馬上から銃殺し、或は撲殺し、捕獲するのであるが、獵犬の爪牙に殖れるものもある。獸類を撲殺するのは、蒙古獨特の打棍子といふ鎌首形に曲つた棍棒の先に金具をつけたもので騎馬のまゝ一撃するのであるが、その妙技は眞に驚嘆に値ひするといふ。

獲物は狼・野猪・黄羊・狐・旱獭・獐・野兔等で、熊・豹・虎等は北部興安嶺の森林地帯に行かなければ見られない。

この日、王公は特に目ざましい働きをした者に賞を與へ、出獵しない者や失策を演じた者には罰を與へ、信賞必罰と尙武の風を鼓吹する。蒙古人たちは、一年中の大快事として終日山野を馳驅するものである。

關東州内のやうに、滿洲の中でも特に開けた地方ですら、田舎にゆけば今でも狼や狐が出る。狐は、夜間、必ず人の通る道路を歩く習性があるので豚肉の中にモルヒネを詰めたものを夕方山に近い路上に置き、そ

枯野原

木枯し 秋雨

時雨

胡沙

の周りに落花生を撒いておくと、深夜、豚肉を食つた狐は落花生を食べるうちに毒が廻つてきて、その附近で悶死してしまふので、そこを捕獲するといふ方法がとられる。これは蒙古草原地帯でも行はれる捕獲方法であるが、また自動車で追跡して射撃する壯快な狩獵法もある。

十月の初旬ごろまでは、南滿洲の遼東半島地方は、まだ秋晴れがついて、旅順の戦蹟順禮とか、仙境千山の探勝等の好シーズンとなつてゐるが、奉天邊りでは、十月中旬には必ず初雪が襲ふのである。それで、十月に入れば、最早、花をつけた一莖の野草もなく、萬目蕭條たる枯野原となり、徒に木枯しの吹きすさぶ日もあれば秋雨に時雨れる日もあるといつた有様である。特に際涯もない大平原の黄塵を捲げて吹きすさぶ時になれば、春の霾とはちがつて風威は凜烈で一寸先も見えず「胡沙獵人面を吹く。漢虜相逢うて相見ず。」といふ景觀を呈する。

今、奉天附近で、十月まで咲きのこる草花を尋ねて見ると、菊の花を

除いては皆無である。眞に、蘇東坡が「菊殘猶有傲霜枝」と吟じただけのことはあると思はれる。

旅大地方でも、十月に入れば、大根を漬物にし、球根の手入れをして蔵ふ時期であつて、十月初めに漸く蕾をもつた菊の最後の仕上げをする。そして、中旬になつて大菊小菊が市中に出はじめ、十月末から十一月三日の明治節前後にかけて鑑賞するのである。

菊の花（九華・寒華）と新栗と、茱萸を景物とする重陽節がやがてくるのも、やはり菊花が咲かうといふ舊曆九月九日であつて、滿洲でも、この三種を揃へようとするれば揃へられぬことはない。そして、時は正にかの田園詩人陶淵明が歌つた好時節なのである。

露凄じうして噴風息み、

氣徹りて天象明かなり。

往燕は遺影無く、

菊

大菊 小菊

菊の花 九華

寒華

露 噴風

氣徹 天象明

來雁に餘聲有り。

酒は能く百慮を祛ひ、

菊は解く頽齡を制す。

「酒確類書」に「歳往き月來つて忽ち復九月九日、九を陽數として並び應ず、故に重陽といふ」とあり、重陽節のことを一名重九節又は菊花節とも稱ぶ。由來、滿人の間では、九を陽數の極として貴ぶ風があるので九が二つ重る九月九日といふ縁起を祝ふ意味もあるのであらう。

「公事根源」によれば、東漢の時代に、汝南といふところに桓景といふ人があつて、その師に當る仙人費長房から、今年九月九日には汝の家に災難がある、當日は家人に袋を縫はせて茱萸（胡頹子）を入れ、それを一家の者が臂にかけて山に登り菊酒を飲めば難を逃れることができようと言つた。そこで桓景は、費仙人に言はれた通りにして當日夕刻山を下つて歸宅して見ると、果して彼の家の家畜は、家人の身代りとなつて全

菊酒

重陽 重陽節

重九節 菊花節

重陽の節句
菊の節句
栗の節句

部斃死してゐた、といふのである。

我が國でも、古い時代から重陽の節句は、菊の節句、又は栗の節句などといはれ、宮中に於ては重陽の宴が開かれたもので、當日、天皇は南殿に出御あらせられ、御帳左右に茶菓袋をかけ、御前に菊を挿した瓶がおかれ、群臣以下に題を賜ると、詩を作つて文臺に据ゑ、講評を畢ると菊酒を賜るのが例であつたといふ。

もとより支那から傳つた行事であるから、桓景の故事を拘んだものであつたことは申すまでもないが、杜甫の「九日藍田崔氏の莊」中に「酔うて茶菓を把つて仔細に看る」と賦してゐる。これは「酔ひながら茶菓を眺め、余が老衰せるを悲しむ」の意であるが、支那では、重陽に茶菓を帶ぶれば災厄疾病を攘ふ、と言ひ傳へられてゐるのである。

滿洲では、現在、茶菓は重陽節になくはならぬ時の物とはなつてゐないやうである。併しこの日登高といつて高い所に登り、菊花酒を酌み詩

登高

花糕

を賦し、花糕を食べるといふ風がある。

登高は、桓景の故事を傳ふためのものであらうが、滿洲では、歩々登高は出世して高位高官となることを意味してゐるだけに若い學生たちはこの日を好んで山に登り、豊かに實る大平野を瞰下しながら詩を吟じたリなどして、大いに浩然の氣を養ふのである。また杜甫の「登高」の詩に「百年多病獨り臺に登る。艱難苦恨す繁霜の鬢。潦倒新に停む濁酒の杯」とあるが、當日高所に登ると災厄や病氣を避け得られると説く人もある。

濁酒

奉天や遼陽といったやうな古い城市では、風雅な古老などよく一瓢の菊花酒や茶壺（大きな土瓶）菓子などを携へて城壁上の魁星樓等に登り、詩を賦したりする。

とにかく、今日では、重陽節の故事來歴は殆ど忘れられてゐるが、鐵嶺では「龍首尋秋」といつて、龍首山に遊山を試み、滿洲の京都と稱ばれ

尋秋

菊糕 重陽糕

てゐる吉林の雅客も北山とか小白山、龍潭山等郊外の山々に散策する日となつてゐる。重陽の日の應節菜として菊糕（重陽糕）といふ菓子と菊花酒を用ひることは昔からの習はしであるが、菊花酒は桓景の故事によるものとしても菊糕は何を意味するかと言へば、糕は高に通ずるため登高と結びつけた食べ物と見るべきであらう。

菊の葉

菊糕は花糕ともいひ、所により製法も異なる。普通、北京や天津あたりののは、麥粉でつくつた厚さ約二分徑二寸ばかりの酥皮（か）になつた菓子を二つ重ね、その間に棗、乾葡萄、松の實、或は栗、胡桃、落花生、蓮の實等を挟んだもので、表面に菊の葉を貼りつけたものだといふ。

女兒節

重陽の日に他家に嫁した娘たちを生家に迎へて花糕を共に賞味する風もあり、そのため重陽節を（女兒節）とよぶことがある。

滿洲では、かうした本格的な重陽糕は見られず、カステラ饅頭に棗や栗を入れたやうな切糕、炸糕、粘糕といったやうな餅菓子などが市中に

散見されるだけである。

烤羊肉

チンギス汗鍋

賞菊

九花城 九花鼎

九花塔 九花山子

我が國で、重陽節の遺風は廢つてゐるやうに、本家本元の滿洲支那方面でも漸く衰微し、わづかに讀書階級即ち念書（ニシヤク）的や風流な都人士の間に喜ばれるだけで、農家などでも格別業を休むやうなこともなく、わづかに姑娘に小ざつぱりした着物を着せ心ばかりの酒肴を供へるといつた程度である。北京等では當日は野外料理として知られる烤羊肉（チンギス汗鍋）を食べるといふことであるが、滿洲の上流家庭では烤肉（ヤキにく）だけでなく豚肉や芋、白菜等で御馳走を拵へ、友人知己を招待して菊花酒を掬む家もある。

要するに重陽節は一部の文人墨客の風流韻事ともいふべきもので、日頃苦心栽培した菊花の鉢を並べ、賞菊（シヤクキク）を行ひ、詩賦をものしたりする向きもあるらしい。殊に九朶に仕立てられた菊は九花城とか、九花鼎、九花塔（九花山子）などと名付けられ、貴重なものとして賞美される。

なほ、菊花酒といふのは、菊の花瓣を酒中に浸したもので酒の種類は問はない。

「采菊東籬下。悠然見南山。」の詩篇によつて愛菊家として知られる陶淵明も、菊花酒を賞味したと見え「九日閑居」の序に

余閑居して重九の名を愛す、秋菊園に盈つれども而も醪さかを持すること由靡し、空しく九華を服して懐なごひを言に寄す。――

と述べ、「己酉歲九月九日」の感懷を次のやうに賦してゐる。

靡々として秋已に夕れ、

凄々として風露交はる。

蔓草 復た榮えず、

園林 空く自ら凋む。

清氣 餘滓澄み、

杳然として天界高し。

采菊 愛菊

菊園

風露

清氣

天界高し

衰蟬

衰蟬 留響無し、
衰雁 雲霄に鳴く。

高化相尋繹す、

人生豈勞せざらんや。

古より皆淡くなること有り、

之を念へば中心焦る。

何を以てか我が情に稱はしめん、

濁酒且く自ら陶む。

千載知る所に非ず、

聊か以て今朝を永うせん。

重陽節を最後として、もはや戸外の行業は殆ど終末をつける。

十月二十六日は明治の大政治家伊藤博文公が、露國蔵相と會見のため哈爾濱驛に下車した途端、不逞鮮人の兇彈に墜れた日である。それは明

博文忌
細雪

低温生活

炭籠 火箸

草掻き

治四十二年のことで、例年、哈爾濱の日露官民相寄り、プラットホーム上に印せられたその終焉の地で博文忌が修せられる。遭難當日は列氏（レオミュール氏寒時計）零下五度を示し細雪霏々としてゐたといふが、花輪を捧げる手がかじかむのは毎年變りはない。

北支方面では、舊曆十月一日以後を採煖期としてゐるが、冬早い北滿洲地方では十月中旬ごろには採煖を開始しなければならぬ。

併し、近來、低温生活が叫ばれ、節炭の必要と相俟つて採煖期が繰りのべになることが多く、子供のある家などでは、内地のやうに、火鉢を出し、炭籠や火箸の用意を必要とする。

滿人の子供たちは、來るべき冷厳な冬に備へて草掻きをはじめ、枯草を根こぎにして燃料の足しとする。

漸く寒さに向ふにつれ、猩紅熱患者の發生が多くなり、滯々ではコレラの侵入に脅やかされるのが例である。

十一月 農具



大連、營口、鞍山、錦州、承德といふやうな極く一部の地方を除いて十一月の滿洲各地の平均氣温は齊しく零度以下となる。十月を滿洲の初冬と見るならば、十一月はもう完全な冬といふべきである。

北滿河川の中でも、北寄りの滿ソ國境線をなしてゐる黒龍江本流や、齊齊哈爾近傍を流れてゐる松花江上流の嫩江等は、早くも十月中旬には流水を始めるところもあるが、結氷するのは、やはり十一月である。

普通、河川が結氷し、江上が氷に封じられてしまふのは、流水開始後二週間前後といふことになつてゐるが、北滿河川は場所により結氷期日に幾分の遅速があるとはいへ、十一月中には例外なしに堅氷に閉ざされてしまふ。

氷の厚さは一米内外もあるので完全に凍結すれば、氷上に枕木を置いてレールを敷きその上を貨物列車を走らせることさへできる。

河水の表面は坦砥の如しといつたものではなく、隨所に波頭のやうな突起があつたりして、結氷の苦悶の跡を見せてゐるところも尠くない。

河水の上につもつた雪を拂拭すれば、鉛硝子の切口のやうに青黒く澄んだ堅氷の肌を見ることが出来る。その堅氷は、厚い一枚硝子のやうに江を封じこめてゐるのであるが、よく見ればところどころに雲母のやうに鱗がはいり、水面には大きな龜裂が見られる。

それは氷結による體積の膨脹によつて生ずるものであらうが、河上に立てば時々遠雷のやうに河水の裂ける音を耳にすることが出来る。北滿洲の俳人の間では「封江」といふ季語によつて、かうした河川の結氷がさまざまに詠詠されてゐるのである。

南流して渤海に注ぐ遼河など、營口附近の下流地方は潮汐の出入や氣温の關係上、結氷するのは例年十二月末から一月にかけてであるが、中流以北は陽曆十一月二十二三日の「小雪」後一週間乃至十日前後と見ら

れてゐる。

小雪地封嚴

大雪江河凍

陽曆十一月二十三日頃の「小雪」には地面が凍り十二月八日頃の「大雪」には河が凍る、と歌はれてゐるとほり、十一月末から遅くも十二月初旬には結氷するのである。

南北滿洲の河川が銀盤のやうに凍結するほどであるから、十一月の各地の最低極氣温を通覽して見ると、北緯四十九度、標高六七百米といふ海拉爾、免渡河等は零下三十五度前後を示し、最も溫暖な大連ですら零下十一度ぐらゐに下るのである。

一方、最高極氣温を見ると、昭和十三年度の富錦のやうに三十三度といつたやうな氣狂ひじみた高温を示さないまでも、各地共二十五度から十度位の間を往來する。

三寒 四温

昭和十四年度の奉天に例をとるならば、同地、十一月の最高極氣温二五・六、最低極氣温(一)二六・三であつて、その差は實に五一・八といふ驚くべき懸隔を見せてゐる。

夏のやうに暑い日があるかと思へば極寒の日が襲つてくるといつた具合である。この現象は、大なり小なり全滿洲各地に起るものであつて、いはゆる三寒四温の週期律が、冬に入ると共に顯著となるためである。

寒い日が三日續いてのも溫暖な日が四日つづくといふ一週間の週期を以て氣温が波うつこの三寒四温は、別に大陸特有のものではなく、日本内地でも屢々經驗されるものである。また、單に冬期にだけ起るとは限らず、滿洲のやうに地貌の變化に乏しい廣大な地域ほど氣壓の配置が割合正しく、それも冬に入るほどその推移が鮮やかに觀取されるといふに過ぎない。

これは要するに北支那蒙古方面から吹いてくる西北の季節風の消長に

よるもので、三寒の日は卓越した季節風に伴ふ寒波の襲来に他ならぬものであつて、岡田博士が週期圖法によつて気温の解析を行つた結果、明らかに七日の週期が発見され、科學的にも三寒四澁といふ俗諺が實證されるに至つたものである。

寒い滿洲にとつて、三寒と四澁とが交互に規則正しくめぐつてくることは、非常に天惠的な條件であつて、どんな寒さも三日ぐらゐしかつづかず、四日目ごろには一息入れることができるといふ安堵はどれほどありがたいことか知れない。かうして、寒波と澁波せんぱとが寄せては返しなから、滿洲の冬は愈々深まつてゆくのである。

東京の平均気温を見ると、最も寒い一月でさへ三度ぐらゐで、一年を通じ零度以下を示すことはない。ところが滿洲となると、南北孰れの都邑を問はず、十二月から二月までの三箇月間は例外なしに零度以下の低温を示すのであるから寒いには違ひない。

併し、不思議といふか天惠的といふか、三寒四澁の週期が割合正確にめぐつて来て、三四日毎に寒が弛み、また、冬になると、風速が二米内外といふ小さなものであり、大氣も乾燥してゐるので襟筋のぞくぞくするやうな悪寒を感じることはない。大氣は死んだやうに動かさず痛いやうな冷たさがあるだけで、むしろ快い寒冷といつた感じである。

木下幸太郎氏によれば、滿洲の冬は、氷の張つた川の下での生活のやうであるといふ。なるほど穿つた表現である。

気温が零度を下るやうになれば暖房を焚かすには生活できなくなる。哈爾濱などは、十月中旬から採暖期に入り、暖い南方の安東、大連、旅順地方でさへ、十一月初旬には暖房の必要を感じる。

旅大地方と気温の共通する北京天津地方でも、陰曆十月一日を孟冬といつて、寒が漸く酷しくなるといふので、當日を以て官公署も一般民家も暖房の設備をするといふ。舊十月一日といへば、陽曆では十月末か十

一月初旬に當るので、滿洲では迎も火の氣のない家には居れなくなるのであるが、石炭節約や低溫生活の唱道によつて、最近では採燧期が延ばされつつある現状である。

さて、この舊十月一日のことを滿人たちは寒衣節かんいせつといつて祖先の墳墓にお参りする日となつてゐる。

滿人の墓参日は、陽曆四月五日の清明節と、舊七月十五日のお盆即ち中元節、それに舊十月一日の寒衣節の日と一年三度になつてゐるが、中でも、寒衣節は床しい行事の一つといふことができる。

寒衣節は、讀んで字の如く多着の節句といつたもので、舊十月一日の孟冬もうとうになれば、娑婆の風さへ身に沁みるのであるから、まして冥土の故人たちは、暮る寒氣に慄へてゐるであらう、といふのが滿人の考へ方である。

さうした、やさしい心づかひから生れたのが寒衣節であつて、當日は

家の中での儀式は春の清明節よりもやつとささやかではあるが、紙でつくつた防寒用の衣服を用意し、それを携へて墓参りにゆく。

富者や貴人の家では、眞物の絹布などでつくつた寒衣かんいを持参し、それを墓前に供へて焼く者もあるといふが、その場合緞子と毛皮だけは用ひないといふ。それは、緞子は断子と音が通じ子孫が断絶する意味があり、また毛皮を身につけた亡者は來世に畜生に生れ變るといふので、禁物になつてゐるのださうである。

たいていの者は、冥衣みやい鋪といふ葬儀用の紙細工屋で賣つてゐる赤ん坊の着られるぐらゐの紙製の寒衣を買つてそれで間に合はせる。その紙といふのは、瑞雲や壽の字を散らしたおめでたい模様入りの紅・青・藍・緑・黄等とりどりの色紙や、或は無地の紙であつて、黒い色紙でつくつた寒衣は鐵製の衣服に見えるといふので用ひない。

手先の器用な人や有閑人は、寒衣は勿論、帽子、靴などまで手製の紙

細工を用意し、念の入つたものは紙の衣の裏に更に刻んだ紙をはりつけて表（表紙）になぞらへ、また綿入、袷、單衣など四季の衣服や反物（尺頭）までやはり紙製の袍に納めて墓地に運ぶ。

これら紙製の寒衣の他に經文を刷りこんだ紙の袋も携行する。その袋の表面には祖先の爵位、名號、その傍に年月日、何某供奉と奉仕者の姓名を記入し、以前は袋の中に、鬼界（陰羅殿）での小遣錢として紙幣代りに黄色の塵紙といつた焼紙、金箔をつかつた紙の元寶（馬蹄金）同じく大洋錢、何十萬元と莫大な額面を記載した偽の小切手（冥錢）などを封入したものらしい。

併し、このやうな丁寧なことをする人々は今では殆ど見られず、多くは包袱（ふろしき）代りの白紙に祖先の名と自分の名を書込んだものに冥錢を包み、或は、ただ、塵紙のやうな焼紙を寒衣のやうに墓前で焼くに過ぎない。寒衣や、例の紙袋や焼紙などを焼くのは、その煙が昇天し

て、彼の世の人々に届くものと考へられてゐるので、この行事を送寒衣（送寒衣）とよぶ。

一般に、この寒衣節の日は早朝屋内に祀つてある祖先の位牌に線香を立て、燈明をあげて禮拜し、夕方墓参して墓前で送寒衣の儀式をする。

出稼ぎや新しい移住者で近くに墓場を持たない者は、門前や町の十字路の真中で寒衣や紙袋に三跪九叩した後、その場で火をつけ心ばかりの送寒衣をやる。

故郷を遠く離れ、かうして遙かに祈りをささげて紙を焼き、故人の冥福を祈るのを「遙燒」といひ、一年三度の墓参日や、故人の命日などにやる者が多い。

異郷で夫を亡つたやうな女が、纏足の足を投げ出して、天を仰ぎ地に俯して手ばなしで慟哭してゐる圖はよく見かけるもので、その場合、恰も生ける人にもものを言ふやうに、口説をならべ、心ゆくまで哭くやうで

十月一

ある。
なほ「清明・中元・十月一・不蒸・不裝・不發子孫」といつて、年に三度の墓参日に蒸した食べ物をつくらない家は子孫が發展しないといふので、蒸した餃子(肉餡頭)を食べる家もある。

寒衣節の當日は、かうして民間で故人の追善供養をするばかりでなく、現満洲國皇帝陛下の御祖先に當る清の太祖、太宗をお祀りした奉天郊外の東陵(福陵)・北陵(昭陵)でも嚴かな陵墓祭が行はれる。

立冬

立冬(陽曆十一月八日)は寒衣節と前後してやつてくる。

立冬要封地(立冬には野良仕事のしじまひだ)といはれてゐる通り、このころには、農家では收穫も終り脱穀風選なども一段落つげるので、その日、了場飯といつて、豪農の家では、農繁期に備ひ入れた臨時の農業労働者たちに晩飯の御馳走をふるまひ、勞を犒ふ。そして、その夜を最後に臨時の者たちは眼をもらつて歸郷するが、年期奉公の年工たちだ

了場飯

精製

けは残つて後始末や精製などに従事するのである。

陽曆十一月廿三日の小雪のころから穀物の精製にとりかかり、自家用を除いて餘つたものを市場に運搬して賣つてしまふ。

市場に搬出するまで、多量の穀物は倉庫に、白菜・葱・韭・牛蒡・人参・大根・山芋・馬鈴薯等の野菜は窖に貯蔵しなければならぬ。

嚴密に言へば、地上の倉庫は困倉の別があり、地下の倉庫には賣窖の別があるのださうである。

困は圓筒形、倉は方形の倉庫のことで、圓く地を穿つたものが賣、方形に穿つたものが賣だといふ。

滿洲では、倉に相當する土倉子と、困に當る圓倉子がある。

土倉子は、我が國の土蔵のやうに、周圍を土壁で塗り込めた草葺の家で、内部を壁で仕切つて各種の穀物を貯蔵できるやうになつてゐる。

圓倉子は、圓筒形の周圍をやはり土壁で塗りこめ、小さな窓と入口を

山芋
山芋
圓倉
賣窖

土倉子
圓倉子

設け、屋根を草葺きにしたもので大きな白に大きな摺鉢でもかぶせたやうな恰好である。

この圓倉子は半永久的なものであるが、周圍を竈のやうに柳條で編み内部を海泥で塗つて粟稈で屋根を葺いた略式のものもある。

特に、充分に乾燥させなくてはならぬ玉蜀黍（包米）には普通の倉子や圓倉子は不適當なので、南洋土人の住家のやうに床の高さ五尺もある小屋をつくり、壁面は風通しのいゝやうに柳條か黍稈で編み、屋根を草や板で葺いた包米樓子といふ倉庫を用ひる。かうした専用の倉庫を持たない農家では地上に黍稈や枕木等を敷き、その上に黍稈を圓筒形に炭俵のやうに編んだ高さ直径共三米餘の包米倉子といふものを設け、その中に包米の實をもいだまゝ、抛り込んで屋根を設けず天日で乾燥貯蔵する。

以上のほかに、大豆などの保管用として圓積といふ方法がある。圓は「竹圍以盛穀也」との字義があるとのことであるが、滿洲には元來竹は

包米樓

黍稈

圓積

糧穀

撒積み

麻袋

出廻る

生えてゐない代り、高粱稈の表皮でつくつた安平といふ蓆を、ちやうど麥稈眞田で麥藁帽子の山をつくつてゆくやうに、地上から圓筒形に巻き上げてゆき、その圍ひの中に糧穀を入れ屋根をやはり安平で葺いたものである。下部は地上に枕木を敷きその上に安平を敷いてあるので、ちよつと安平製のタンクを据ゑたといつた形である。

糧穀問屋ともいふべき糧棧の庭などでは、單に枕木を地べたに置きその上に一面に安平を敷きつめて、大豆などを山のやうに撒積みにし防漏布を覆せたものや、大豆のつまつた麻袋を一貨車分三百五十二袋（三十噸）を枕木の上に山のやうに積上げ、安平や防漏布で覆つた簡単な野積なども見かける。

糧穀の出廻る冬期の滿洲は、とかく、雨量が少く濕度も十月ごろから來春四五月にかけて低くなるので、引漏の心配は殆どないので、かうした簡便な方法で貯蔵できるのである。

蔬菜の貯蔵には、地窖といふ穴倉を設け、冬籠りの間の用に供する。その構造は、深さ約三米、長さ約四米、幅約二米の長方形の穴を穿ち、その上に丸太の木材を渡して黍稈を一面に敷き土を被せたもので、中央に出入口をつけてある。寒さが酷しくなるにつれ、貯蔵中白菜など往々腐敗することがあるので、一箇月に一回、上下に置換へ、日中は地窖の出入口を開けて換気することが肝要である。

糧穀搬出用の車や桶には色々種類があるが、最も一般的なのは滿洲式の荷馬車即ち大車であらう。それは我が國の荷馬車よりは稍々小型であるが、如何にも頑丈で車輪の上に泥除けと積載量の増大をはかるため耳板子といふものが車體の兩側に取付けてある。

車體の大小により大車と小車の區別があり、車輪の數や形の差異によつてそれぞれ名稱が變る。北滿地方の大車は、轂と輪を維へる輻がキの字形になつてゐるものが多く、南滿洲方面では、普通の車輪のやうに輻

が放射狀になつてゐる。花粘輪車といふ大車を多く見うける。

最近、大車では、鐵輪の大車のため道路が損傷されるため、自動車のタイヤをつけた膠皮車がめつきり多くなつた。

なほ、南滿地方では、木材運搬に都合のよいロシア式の四輪車を使つてゐる。この四輪車は四粘輪車といつて、前輪一對は後輪よりも小型である。濕地帯では車軸を浸さないやうに特に車輪の大きい大粘輪車を使つてゐる。その車輪は大きいには大きい、が車體も細身の材木を用ひ、至極輕快に出來てゐる。

四粘輪車や大粘輪車は牛に曳かせるものも多いが、たいていの大車は一頭乃至七八頭の馬に曳かせる。挽馬の頭數は、積荷の大小や道路の良否によつて加減されるが南滿地方では一車に一頭乃至三頭か四頭ぐらゐるもので、北滿洲では六七頭曳きのものが多い。

その積載能力も道路の凍結條件其他によつて一定しないが、先づ七頭

扱力 把犁

扱架子

曳は約一・八頭、六頭曳で約一頭半と見れば大した間違ひはない。
大車の他に、氷上輸送用として扱力（把犁）即ち扱架子を使ふことも少くない。

春から夏にかけて、農具や種子の運搬に用ひた扱架子といふ地上用の機なども、冬になるとその上に板を敷き、凍結した路上や河上で大いに輸送能力を發揮するものである。

扱力は、普通は人力で曳いたり押したりするが、扱架子は馬などの役畜に曳かせる。

滿洲國興農部當局では、滿洲經濟の根幹をなす農産物の出荷奨励のため、小雪の前後になれば、各地に宣傳隊を繰り出し、芝居等を利用して大いに宣傳これ力むるものである。

邦人側の祝祭日は十一月三日の明治節に始まる。大連あたりでは、毎年初雪を見るか見ないかといふ時期なので、當日は菊花の展覽會が催さ

明治節

七五三

毛皮 防寒外套

新嘗祭

健康週間

戸外デー

れ、商店の飾窓には清楚な黄菊白菊の生花などが飾られる。

中旬十五日の七五三祝ひの當日は、旅大地方の神社では着飾つた童女たちが親兄弟にかしづかれて参拜すること内地と變りはないが、北滿洲では、せつかくの綺羅錦繡も重たい毛皮の防寒外套（防寒外套）に裹んでお詣りしなければならぬ。

十月から十一月にかけては結婚の季節だけに大陸の花嫁花婿が神前に踵を接する。

廿三日新嘗の祭日には、もう戸外では行樂は全然できない。

そして、その頃から月末にかけて全滿健康週間の諸行事が各地一齊に催され、血清検査、検便、患者奉仕投藥、體温器検査、體育相談、健康診断、齒科診断等市民のため無料奉仕し、その間にラジオ放送や戸外デーなどの催しがある。

戸外デーには、穴熊のやうな冬期の室内生活を打破して外氣に觸れる

二重窓 目次

ことを強調した「健康第一外へ〜」といふやうなリフレインを高唱して、市中の小學生たちが行列をつくつて町中を游行したりする。ロシア人などは、どんな寒い時でも老幼男女とも一日一度は戸外の散歩を缺かさぬといつた、寒國での保健生活の眞諦に徹した生活を不知不識の間に實行し、滿人なども、建てつけの悪い家に住んでゐることや、直接外気が吹きこむやうな住居に生活してゐるため室内の換氣が行はれるといつたやうな簡易生活の賜として、自然的に健康に恵まれてゐるのである。

そこにゆくと、寒國生活の経験の浅い、温帯からの移住者である日本人は過熱した室内に蠢動して寒冷な外氣に觸れることを極度におそれる結果、二重窓は目張^{めば}して新鮮な外氣を拒否するといふやうな、不健康な生活に陥り易いので、健康週間の備しは、かうした悪習への反省の機縁ともなるやう設けられたものと思ふ。

デフテリヤ
猩紅熱

火災

震災

滿洲チブスも八・九・十月を最猖獗期として猛威を揮ふが十一月には漸く下火となる。

ところが、今度はデフテリヤ、猩紅熱が十一月に入ると同時に俄然多くなる。

火災も關東州を含む全滿十四都市の統計を見ると採燬期が件數の九割以上を占め各所に頻發する。

それも、ストーヴやベーチカの焚き方の不手際から屢々窒死事件などを惹起する日本人の家庭から發火することが尠くなく、原因は煙突破損等に因るものが大部分であるが、夫婦二人だけの世帯が火元になつてゐるといふ例が統計上最も多いといふことである。十一月七日は舊曆の十月廿五日に當り、過激派がロシアの政權を獲得した十月革命の日である。

ソ聯では當日を革命記念日として祝ふが、祖國を追はれた亡命の白系

非妥協の日

寒驛

杜翁忌

露人たちは、この日を「非妥協の日」とよび、皇帝以下非業の死を遂げられた反革命の同志の追悼會を催し、反共の決意を固くする。

十一月二十日は文豪トルストイがアスタポオ（寒驛）に行き暮れて亡くなった日で、杜翁忌を修する者がある。

十二月

風帽



滿洲の南北を通じて、十二月に入れば平均気温は例外なしに零下に降り、そのまゝ二月までつゞく。

最高極気温でさへ興安、海拉爾、滿洲里、克山、黒河、富錦、東安等一月まで零下數度を示す。

最高、最低気温も、もはや十一月ほどの大きな開きを見せなくなり、嚴寒季の様相を呈してくる。

冬至不行船——陽曆十二月二十二日ごろの冬至には通ふ船もない——といはれ、南流する遼河さへ、中流以北は、十一月二十三日の小雪の後一週間か十日間ぐらゐのうちに結氷するといふから、十二月初旬には完全に氷に鎖されてしまふのである。

たゞ、下流の營口港附近から三叉河に至る地域は、潮汐の影響をうけて、流水期間が結氷前一箇月もつゞくことがあり、稀には流水期だけで結氷を見ない年もあるといふ。

嚴寒季
冬至

併し例年の結氷日を調べてみると、結氷の早い年は十二月二十五日、おそい年は一月二十二日となつてゐるが、一月中旬までにはたいてい結氷してしまふのが通例のやうである。

河川が凍つてしまへば、河水の上はもちろんのこと、およそ交通上の大敵たる泥濘とか濕地とかはなくなり、野も山もすべてコンクリートで固めたやうになるので、所きらはず、大車を通すことができる。まことに、冬期こそ交通上の天國といへる。

それで、地方の農村から市場へ向つて農産物の運搬など、十二月に入ると特に目ざましくなり、河上を橋で輸送するものもあれば、大車を運らねて搬出するものもある。

以前、匪賊が出没したころには、一村のものが馬車輸送を結成し、武装した自衛團員が附添つて護送したものである。

村から市場までの行程も、所によつてそれぞれ差異はあるが、たいて

馬車輸送

趕車的

白一色 寒風

吹きさらす

風帽 防寒帽

耳頭帽子

砂鍋帽子 耳帽

綿襖 中入綿

綿袍

い四、五日はかゝるので、長い釣竿のやうな鞭をうち振つて六、七頭の馬を御してゆく趕車的たちは、めいめい人馬の食糧から寝具まで用意して出かけるのが常である。

何方を向いても白一色の曠野をしかも零下二三十度といふ寒風の吹きさらす中を、幾日も旅をつづけてゆかなければならないのであるから、その行路難は想像に絶するものであるらしい。

それだけ駈者の趕車的の防寒的服装は一分の隙もあつてはならないわけである。

蒙古人は風帽といふ毛皮で裏打した防寒帽をかぶり、滿人たちは北滿洲では耳頭帽子、南滿洲地方面では砂鍋帽子といふ毛皮の耳覆のついた防寒の帽（耳帽）をかひる。

着物は、綿襖といふ綿入れの長衣に、更に中入綿二斤をつめこんだ大綿襖又は綿袍といふ厚い綿入れを重ねて着、その上から紺色木綿の帯、

捷布 皮袍

羽織

手袋

手握子

皮套袖子

マッフ ムフタ

補衣裳 修拾鞋的

「捷布」を前結びに締めてゐる者が多い。また、皮袍といつて、羊の毛皮を裏付した長衣を羽織つてゐる者もある。

手袋はたいいてい手製のものが多く、剣道具の小手か、スキー用の手袋のやうに、拇指と他の四本指とを二股にした綿入れの手袋か、羊の毛皮を裏皮につけた手握子を用ひる。

また、手握子のかはりに、西洋婦人の用ひるマッフに似た皮套袖子といふ布で圓筒形に縫ひあげ、その裏に犬の毛皮をつけたものへ兩端から左右の手をつゝこんでゐる駈者も見受けられる。

なほ、マッフのことをロシア人はムフタと呼び、表裏とも毛皮でくるみハンドバック兼用としたものを婦人が愛用してゐるのをよく見かける。

寒風の吹きさらす街角の日向に、纏足の足を投げ出して出稼ぎの苦力たちのために綿入れの繕ひなどしてゐる針仕事の女補衣裳や、靴修理の修拾鞋的を見かけるのもこのころである。

烏拉鞋 皮紐

烏拉草

次に、趕車的は、烏拉鞋といふ牛皮製の粗野なるものを穿き、皮紐といふ幅八分ぐらゐの同じ皮製の細紐で巻脚絆のやうに結へつけてゐる。この靴の中には烏拉草といふ草をつめ込み、足と靴皮の間に密着して保温の用をなすやうになつてゐるのである。

ワタスダ

毛子草 紅根草

烏拉草といふのは、滿洲隨所の水邊に繁茂する和名「マンシウワタスダ」といふ草で、滿人間では毛子草、紅根草、護臘草の名があり、防塞用に供するほか敷物、苫、蓑、繩等の原料として極めて用途が汎いので

黒貂

野生の藥用人蔘や黒貂の毛皮と共に遼東の三寶として數へられてゐる。鞋の中につめる烏拉草は時々つめかへねばならないので、一冬十五斤ぐらゐ要ることになつてゐる。一斤三錢ばかりで、街頭で烏拉草の代用として、玉蜀黍の實をつゝむ柔軟な皮、即ち、包米葉子を用ひるものもある。

包米葉子

綿鞋 毡鞋

このほか、防寒靴として綿入れの布靴「綿鞋」フェルト製の「毡鞋」

毡窩兒 草鞋

防寒具 車店

糧店

糧棧

糧車店

「毡窩兒」、蒲の葉や莖稈で編んだ「草鞋」などがある。

さて、上から下まで防寒具で身をかためた趕車的たちは、往復の途中車店又は糧店といふ馬車宿に泊りをかさねてゆくのである。

以前、積み出した糧穀を、穀物問屋ともいふべき「糧棧」に農民が直接賣りつけてゐたころは、これらの車店や糧店で取引の斡旋までやつてゐたので糧車店の名もあつた。

車店は多數の大車群をそのまゝ曳き込んでおかなくてはならぬので院子（中庭）を廣くとり、外壁は板塀や土壁でかこひ、入口の人目につくところに高い柱を立て、上部のところどころに十字架なりに木製の鯉を取りつけてある。これが車店の看板であつて、鯉は、口に飾りの布などを銜へてゐて、遠くからでもその位置をすぐ知ることが出来る。

この車店は、なるほど馬車宿にはちがひないが、たゞ室内で一夜を明かすといふだけのことで、趕車的たちは人馬の食糧から寝具まで、自分

馬車宿

寝具 蒲團

褥子

枕

褥套

で携行しなければならぬ。

寝具といつても、いはゆる煎餅蒲團であつて、敷布團など持たないものもあり、持つてゐる敷布團「褥子」も幅三尺、長さは身長一ばいといつた極く小さなもので、中入綿も二斤ぐらゐしかはいつてゐない。掛布團の方は、褥子よりも稍々廣いが、やはり煎餅ぶとんで、褥子を焼（おんどろ）上に敷き、それを掛蒲團即ち「被」で包み、状袋のやうにしてその中で寝るのである。

よつうの旅行者でも、たいていは蒲團は携帯することになつてゐるので、日本人の蒲團のカペーのやうに、真ん中に縦に穴のあいた帆布製の褥套の中に褥子も被もおしこみ、それを巻いて肩にかついで旅に出るといつた具合であるから、趕車的も馬車にくくりつけてゆくわけである。

愈々、明日は目的地に着くといふ時には、夜半に客店を出て、翌日早朝に市場に入るやうに出發する。

まだ統制にならぬ時代には、特産物の相場が日々變動してゐたので、地方の豪農の家から大車を仕立てて出かけてゆくといふ時など、その家の家扶のやうな男が騎馬で市場に先發して當日の相場を打診し、有利に賣捌くやう工作したものであつた。

併し昭和十二、三年の交、全滿各地に農事合作社（従来の農事合作社と金融合作社を統合し現在は興農合作社となる）が設立され、その経営下にある交易市场を通して取引されるやうになつてから、かうした妙味はだんだんなくなつてしまつた。

交易市场は、廣い空地に鐵條網や木柵で圍ひをしてあり、農産物の出廻期になれば、糧穀を満載した大車が早朝から陸續と押しかけ午前中はひどく雑沓する。出口と入口とを別々に設けて整理しても日没まで車馬輻輳し、日曜なしといふ勉強ぶりである。

交易市场が定刻開門されるのをまつて、大車は相次いで進入するが、

交易市场
出廻期

穴子

抽坊 磨坊 餾餾
買糧的

門口で受付手続をすますと、麻袋詰めものは、口を開けて検査員に見本を提供せねばならぬ。この場合、検査員が自ら見本を採取するものもあり農民の方で差出すものもあり一定しない。また麻袋詰めものは口を切らねばならぬが大車の上にアンペラで囲ひをした穴子に糧穀を撒積したものは、そのままで見本を掴み出せばいゝわけである。

検査員に渡された見本は糧穀検査室に運ばれ、そこで、大豆ならば水分や色豆の混入、虫喰、不熟粒の多少により、特等一等から四等及び等外に分けられ、小麦ならば、質量を計つてそれぞれ格付、級等を決定し検査票が農民に渡される。

そこで、交易市場開設當初は糧棧、油坊（製油工場）磨坊（製粉所）焼鍋（焼酎製造所）の買糧的（買付人）が検査格付けした等級に應じて糶りあげ、最高値をつけた者に落札するといふ仕組みであつた。そこで、買受人と賣買価格が決定すると、交易市場から買付けた糧棧まで大車を曳

飛子

糧棧掌櫃

量斗的

いて現品を院内に持込み、計量ののち飛子といふ仕切書に賣渡の數量を記入して糧棧掌櫃とよぶ事務所で代金又は物資の交付をうけ、その中から、賣上金の一乃至三分の手数料を交易市場に支拂ふといふのである。また、糧棧での計量は、農民各自にやらせる糧棧もあるが、糧棧によつては、量斗的といふ熟練した計量者がゐて、不正な計り方をして巨利を博するものもあつた。

最近になつて、統制強化に伴ひ、必ず交易市場に於て、糧棧組合の組合員又は合作社に農産物統制會社の公定の收買価格で割當てることになつたので、農民は糶賣の煩もなく、交易市場に従價の千分り八の手数料を納めて指定の糧棧に搬入すればよいことになつた。

まだ統制が實施されなかつた時分には、糧棧では囤積又は撒積みとして院内に貯藏し、値上りをまつて特産物商や輸出業者に賣渡してゐたが今日では價格の變動もないので、手持ちするものはなくなり、糧棧組合

から地方の油坊組合や加工業組合を通し組合員に配給されるのである。

なほ、糧棧組合員は、農産物統制の諸會社か、縣長又は旗長の命令した特約收買人や代理收買人に現品を受渡しする際は、一應精選して麻袋につめ、口縫をしたうへで驛出しし、貨車積みを終つたらその證券を、大豆ならば等級別の混合保管證券を收買人に送附するのである。そしてこれら收買人の買受けた糧穀は、更に農産物統制諸會社に渡され、國內配給と國外輸出にそれぞれ振向けられる。

近來、交易市場に農業倉庫を設置し、農民が搬入して來た大豆と小麦の二種類に限り、検査格付後計量して品種別等級別に保管し糧穀受入證を渡す。農民はそこで收買人名の記入を受けその受入證を持つて合作社事務所で糧穀の代金を受取ることが出来る。一方、當日糧穀を買付けた糧棧や收買人は各種類別、等級別により混合保管證券を受取り、必要に應じ隨時現品を出庫してもらふ。つまり農業倉庫を銀行とすれば、混合

滿洲大豆

保管證券は小切手のやうなもので、取引上非常に便利である。

因に滿洲の主要農産物は、産額世界第一の稱ある大豆を筆頭に高粱、粟、包米（玉蜀黍）を擧げることが出来るが、高粱、粟、包米は九割以上は國內消費に當てられ、國外に輸出される量は僅少である。

ところが、滿洲大豆だけは、年産四百萬噸乃至四五〇萬噸の中國内消費は僅か三割で七割までは原豆又は加工品として歐洲及び日本に輸出されるのである。

それで、糧棧では買付けた大豆を自家の院内に撤積にして保管し、乾燥、精選の上麻袋につめ、それを大連、安東、營口、羅津等の輸出港に向け貨車積して輸送したものであるが、大連埠頭などでも大豆の出廻りの繁忙期には寒天にアンベラを覆つて野積みし、ここでも混合保管（こんごうほくかん）を行ひ、輸出業者の便宜を計つてゐる。併しながら最近では歐洲への販路が杜絶し、大部分は日本向けとなつてゐるやうである。

野積み 混合保管

さて、農作物の運出販賣は、舊正月までが最も旺盛で、春の解氷時までにつづく、農産物統制機関にあつては、糧穀の出廻りを促進するため、奨励金制度などを設けて市場への搬出を急がしてゐるが、この運出の後が農家では冬ごもりの時季である。

クリステイの『奉天三十年』によれば「室内は決して過熱せられない。立て附けの悪い戸の隙間や、紙張りの窓や、また居間から直接戸外に通ずる戸を開けるために、絶えず換氣がなされる。」とある。

この換氣のため、無意識のうちに衛生的な冬期生活が行はれるといふのであるが、農民の方では、通風や採光は犠牲にしても室内の温度を高くしようと努力するのが常である。

日本人やロシア人のやうに、暖房としてベーチカとかストーヴ、スティム、温水暖房等を使ふわけではなし、たゞ炕カウツ（オンドル）のみにたよつてゐるのである。それで、室内の温熱を、少しでも戸外に逃がさない

換氣

採光

ベーチカ ストー

ヴ スティム

温水暖房

障子 花障子

燃料

切株 枯草

拉柴火的 薪採り

採炭

石炭 煉炭

コークス

やうに、入口には厚い布製の幕を下ろし、窓には豆油を塗つた障子をはめる。その窓障子の棧は花模様仕組まれて花障子カウツといひ、なかなか雅味があるとはいへ、室内は薄暗く空氣は蒸れて濁り、葉煙草の臭氣などがたちこめて、まことに猥雑である。

炕カウツの火熱といつても、炊事用の竈の煙が炕の下を通るやうになつてゐるので、兩方兼用といふことになる。

燃料は、農村では作物の莖稈類が主である。併し、永い冬のことであるから、それも不足がちなので、しまひには高粱や玉蜀黍の切株や枯草まで根こぎにして丁寧に土をはらひ落して燃料とする。貧しい農民になると、冬は副収入として拉柴火的ラチャイカといつて薪採りをする者もある。

かうして、墓地の松の木を除いて他の草木はほとんど採炭燃料に供されてゆく。

都會での暖房燃料は主として原地産の石炭、煉炭、コークス等である

煤球兒

薪

節炭 採煤日

火鉢 炭火

炭焼き

無煙 煤煙

が、北支那に近い錦州、熱河省地方では無煙炭の粉末に泥を加へて自家でタドン大に固めた煤球兒を愛用する。またハルビン、チチハル方面では白桃などの薪を焚く家が多い。

近年節炭が唱道され、採煤日が繰延べられるやうになつてから、日本式に火鉢に炭火をおこしてゐる家庭も少くない。

現在、北滿洲の我が開拓地などでも炭焼きをやつてゐるところがあるが、安奉線（安東—奉天間）沿線の郵家堡方面でも日本人の手で炭焼きが行はれ、滿洲の市場に出廻つてゐるやうである。

滿洲南端の旅順、大連あたりでも、採煤期は先づ十一月中旬からであるが、今日では、節炭の上から十一月廿五日よりと要請されてゐる。それで、十二月には、全滿洲を通じ暖房を焚かない家はない上に、冬は静謐無風の日がつづくので、市街地は各戸から吐き出す煤煙が霧のやうに立ちこめ、室内でも戸外でも足袋はいつか薄黒く汚れ、鼻孔もまつ黒になる。

なる。

煤雀

防寒服 雪の道

靴

イズウオーシヤ

石疊

寒空

雪さへも、連日の寒氣で融けない間に、煤煙のため煤けてしまふし、雀までが冬の間は鮮やかな羽毛の紋様を失つて煤雀になつてしまふ。

町に煤煙がおりてゐるやうな夜はきまつて四溼の時である。そんな時など、防寒服を着こんで客馬車に乗つて雪の道を走らせるのは、まことに快適なものである。

北滿洲の客馬車は、ロシア式に靴が大きく、馬の頸の上に弓でも張つたやうである。それが首に吊つた鈴を鳴らして走る圖もなかなか風情がある。

殊にハルビンなど今もロシア式のイズウオーシヤといふ客馬車が街頭で客を拾つてゐるが、ザバイカル産の大きな馬が、憂々と石疊の道を寒空に蹄鐵の音を響かせながら疾驅してゐるのを見るからに爽快である。

寒國の生活に馴れたロシア人は、ながい沈鬱な冬をできるだけ快適に

二重窓

造花

換氣孔

氷紋

サモワール

ウォッカ 火酒

鼻毛凍る

スケート

過ごすてだてを怠らない。二重窓の間に鋸屑や綿などを敷き、その上に造花をふり撒いたり、室内にも色鮮やかな造花を飾つてできるだけ色彩的にしようとする。室内の空気を新鮮にするため換氣孔を設け、その蓋を開けると外気が孔内の風車を廻しながら流れこんでくる。その音も冬籠りのところを爽やかにするに足り、窓にはりついた氷紋も日に照り映える時は殊に美しく見える。

冬の夜長を家族そろつてサモワールを囲み、コックでコップにお茶を何杯もついでには夜更けるまで談笑する。或は、強烈なウォッカ(火酒)を咽喉に投げ込み、鼻毛も凍る戸外に散歩に出かけたりする。キタイスカヤ街のベンチはこれら散歩客のため空席もない。

十二月中旬過ぎれば、旅大地方でも池氷が凍結するので、スケートが盛んになる。スピード用のスケートをつけてゐる者もあれば、フイギユア用のものを穿いてゐるものもあり、國民學校生など下駄の裏に金具を

下駄スケート

氷溜場

溜水

氷面

フード帽

一陽來復

つけた下駄スケートで滑る。中等學校等でも正課としてゐるものが多く冬のプールは校内の氷溜場を利用される。

動人になると、雪間スケート(溜氷)をする時間に恵まれないため、スケートpondでは、照明をして、氷面を銀盤のやうに照らし出し、夜間にも場内を開放する。フード帽をかぶり、スキースポンをはいた若い女たちの姿もスケーターの中に見うけることが多い。

日も短かくなり、滿洲國の北端に近い黒河など、十二月二十二日の冬至には日出八時二十分、日没午後四時二十九分であるから、一日の日照時間は約八時間、つまり一日の三分の一といふ日の短かさである。

冬至といへば、清朝時代には、この日は一陽來復の日として、文武百官は威儀を整へ宮中に参賀したものだといふが、現在では、滿洲國官内府など何等の儀しもないやうである。

このほか、陰曆十一月の滿人の行事は、とりたてていふほどのものは

月天心
月當頭

ない。

満洲では陰暦の一月十五日と七月十五日を元宵節、中元節としてそれぞれ節日としてゐるが、舊十月十五日の下元は殆ど顧ない。

そのかはり北京方面では、舊十一月十五日の夜は「月天心」又は「月當頭」といつて、この夜、子供たちは夜おそくまで寝もやらず、月が天心にのぼる當頭の刻を待ちかねて戸外に飛び出し、階段などに立つて自分の影を足許に落して喜ぶといふ。

子供たちは、この夜は、物の影がすべて圓くうつるといふので、それを試して見ようといふのである。

北支那方面の行事を、ほとんど満洲の地に移してゐる満人たちではあるが、特に北京天津方面からの移住者の間でさへ、この童心に満ちた床しい行事は、今ではほとんど行はれてゐないらしい。

なるほど、北京あたりなら満洲の大連、旅順などと気温がほと似てゐ

凍寒

友陽誕生

クリスマス

聖ゲオルギー

るので、かうした行事もできようが、満洲の大部分の地方は、凍寒肌をつんざく時季ではあり、殊に月が天心に上る深更の寒氣は又一入であるから、かうした行事が廢れるのも無理からぬことかとも考へられる。

月當頭の翌る十一月十六日は「太陽誕生」といつて、物固い満洲人の家庭では、屋外に祭壇を設け、供物を供へ、線香を立ててお日様を禮拜する。當日は棗の實をちりばめた大きな饅頭を供物にするらしいが、それを食べると、齧齒ができないといふ迷信があるので、家中のものがあらずつて食べるといふ。

ギリシヤ正教の熱心な信者である白系露人たちのクリスマスは、ロシアの舊暦でやるので、十二月二十五日には何事もないが、そのかはり、十二月九日と十九日とは、彼等が尊敬する聖ゲオルギーと祭司長ニコライの日として慶祝する。

十二月九日は、舊露暦で十一月二十六日に當り、一七六九年に女皇エ

軍隊の祭

カトリナ十二世がロシア軍人の功績を表はす最高勲章たる聖ゲオルギー章を制定された日で教會の祭日でもあり、また軍隊の祭日である。

舊帝政時代には、當日は盛大な祭典と皇帝親臨の上に觀兵式が行はれゲオルギー勲章佩用の勇士に賜餐の御沙汰があつたといふが、今も帝政の復活を信じてやまぬ在滿の日系露人たちは、當日を勇氣と、犠牲的精神と勝利とを意味する日として内心深く祖國の復活を祈念する日としてゐる。

ニコライ祭

十二月十九日は聖ニコライの日に當るので、ロシア最後の皇帝ニコラス二世の名付日でもあり、ハルビンでは、ニコライ像を奉安してある中央寺院、ザトン教會、ハルビン驛にロシア人の善男善女が參集して敬虔な祈禱會を催す。

由來、ニコライの聖像は旅行の平安を司る神様とされ、ハルビン驛の一、二等待合室に安置してある聖ニコライ像は遙々舊都モスクワから將

雪の驛

來されたものとして殊に尊信されてゐるので、雪の驛舎も、この日ばかりは雲集する流離のロシア人信者によつて美しく色彩られる。

なほ十二月四日は聖母を初めて寺院に連れて來た進堂祭の日に當りギリシヤ正教の大祭日である。また十二月十三日は聖アンドレイ祭で海軍の軍神として盛大に祭る。

十二月十四日は、日本人にとつて忘れることの出来ない義士討入りの日として、各地禪寺等で義士祭が催される。

この前後からポーナスの噂が取沙汰され、入滿船は正月用品を満載してやつてくる。下旬にもなれば、歳の瀬の慌しさなど内地と同じく、年末年始の休暇を利用して歸國する人たちで輸送陣は緊張し、船腹は膨れあがる。

中旬から歳末同情週間に入り「寒い年末、温い同情」のポスターが貼られ慈善鍋など街角に見受けるやうになる。大連の聖徳會などでは、例

義士祭

正月用品

歳の瀬 年末

歳末同情週間

慈善鍋

施飯 施米

施粥

饅芋屋 烤白薯

甘栗賣り

栗子

年十二月二十日ごろから翌年三月までの結氷期に三ヶ月の間、失業者や不幸な人たちのために施飯や施米をつづけて来たが、滿人慈善團體でも、滿人細民階級のため十一月ごろから施粥をはじめるのが常である。

盛り場の露路などに焼芋屋（烤白薯）がうづくまり、じりじりと歳が押しつまつてゆく寒夜、甘栗賣りの「甘栗ぬくい」の呼聲が二重窓を透して聞えてくるのは如何にも滿洲らしい情調があるものである。なほ、熱河承德の邊では提燈を片手に、胡同から胡同へ、栗賣りの少年が「栗子、栗子」と呼びながら游行するといふ。

滿洲の季について

結論を先に言へば

春は新緑、夏は繁茂、秋は黄落、冬は荒涼といふふうに、四季の区分は觀念上のもので、嚴密な科學的根據などはないやうである。

氣候が溫和で、春夏秋冬がきはめて規則正しく循環し、且つその推移が明瞭に觀取される日本内地や支那でさへ、陰曆二・三・四月（陽曆三・四・五月）を春とするものもあれば、陰曆正・二・三月（陽曆二・三・四月）を春としてゐる向もある。

また立春（陽曆二月四―五日）立夏（五月六日）立秋（八月八日）立冬（十一月七―八日）をそれぞれ各季の初めとする分け方もあり、西洋では春は春分（三月二十一日）から、夏は夏至（六月二十二日）秋は秋分（九月二十三―四日）冬は冬至（十二月二十二―三日）からとしてゐるといふ。

このやうに、四季の区分はまちまちであるが、各季とも三箇月づつになつてゐるこ

とは孰れも同様である。

ところが滿洲では、まづ一年の半分、つまり六箇月は冬なのである。

たとへば、累年の平均氣温が零度以下にある時期をもつて定められた採煖期間を冬と見るならば、滿洲で最も寒い海拉爾地區が十月五日から、翌年の四月三十日まで約七箇月、最も溫暖な安東地區ですら十一月五日から三月二十日まで約五箇月といふ長さである。

殊に、海拉爾に近い興安など、標高が高いせゐもあつて十・十一・十二・一・二・三・四の七箇月間は月々の平均氣温は零下を示し、年平均氣温も一三度となつてゐる。

それで、十二箇月の中六箇月を冬が占めることになる、あとの六箇月のあひだに春と夏と秋とが相次いで訪れることになる。

現に、北滿洲では、春は三日しかないといはれるほど束の間に過ぎ去り、冬から一氣に夏になるかと思ふと、今度は秋を素通りにして、木々は青葉をつけたまゝ、一足飛びに嚴冬に當面するところもある。

こんな有様であるから、四季を各々三箇月づつに割當てるといふことは満洲ではかなり問題があると思ふ。また、内地の四季をそのまま満洲に當てはめることについても議論の餘地が多分にある。

緯度の上から見ると、満洲は、北は樺太の北端から南は我が秋田縣や岩手縣あたりに相當してゐる。そこで満洲が若し内地と氣候風土を同じくしてゐる土地ならば、満洲が我が東北地方や北海道、樺太などと似通つてゐる筈であるが、實際は決してさうではない。

いま、満洲南端の大連と、ほぼ等緯度にある秋田との兩地と、我が國の最北端にある樺太の敷香及びその地と殆ど緯度を同じくする北満洲の海拉爾について、各月の平均氣温(攝氏)を比較して見ると、日本と満洲との間に著しい氣温上の懸隔があることを發見する。

次の表によると、先づ寒さも暑さも、満洲は日本よりも遙かに酷烈であることがわかる。

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大連	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	10.8
海拉爾	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	10.8
秋田	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	10.8
敷香	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	10.8

冬は冬なりで寒く、夏は夏で暑いことはよいとして、三・四・五月ごろの飛躍的な氣温の上昇と、九・十・十一月にかけての急激な低下とは、満洲の氣候上の特徴をそのまま示現してゐるものとして注意されねばならぬ。

即ち内地の四季の移りかはりは極めて緩慢で、二月を谷にして氣温のグラフは八月の峠まで徐々に上つてゆき、それから次第々々に下つてゆくのであるが、満洲では、四・五月の候にかけて急角度をなして上るかと思はれる間に、早くも七月を峠にして九・十・十一月と急傾斜をなして冬の谷底に落ち込んでゆく。

若し、この氣温の相貌を圖示するとすれば、日本のそれが、なだらかな丘陵のやう

な拋物線を描いて推移するのに對し、滿洲の氣温は銳角的な峻しい山形をなすわけである。これは、とりもなほさず、春と秋とを慌しく迎接する滿洲の氣候の激しさを物語るものに他ならない。

日本の北端に位する敷香でさへ、八月に最高温を示すのに對し、廣い滿洲で八月の氣温が一年中で最も高いのは、僅かに大連地方だけであつて、他は盡く七月が最も暑く、それからは下り坂となつてゐるのである。

むづかしくいへば、島國日本の氣候は、どこまでも海洋性氣候であつて、大陸性氣候の滿洲とは根本的に氣候の性質を異にしてゐるのである。

それだけに、日本の四季を、そのまま滿洲に當てはめることは、非常に不自然でもあり、また、無理でもある。

従つて、滿洲では独自の立場から四季の區分が行はれなければならぬ、といふことになるが、それを科學的に決定することが本稿の目的ではない。

ここでは、専ら滿洲に於ける句作上の俳句の四季の月分けに就て一私案を試み、そ

の提案の理由を論述して見たいと思ふのである。

そこで、先づ結論から言へば、滿洲を南滿洲と北滿洲とに分け、南滿洲にあつては現在日本内地で行はれてゐる俳句の歳時記に従ひ、内地同様各季を三箇月づつとし、北滿洲では次に示すやうに、冬を六箇月、春・夏・秋をそれぞれ二箇月づつとしたものである。

南滿洲	冬	春	夏	秋	冬
北滿洲	冬	春	夏	秋	冬
	一月二月三月四月五月六月七月八月九月十月十一月十二月	一月二月三月四月五月六月七月八月九月十月十一月十二月	一月二月三月四月五月六月七月八月九月十月十一月十二月	一月二月三月四月五月六月七月八月九月十月十一月十二月	一月二月三月四月五月六月七月八月九月十月十一月十二月

南・北滿洲に分ける

先にも述べた通り、四季の區分はどこまでも觀念上のものである。

特に俳句の句作上の四季にあつては感じを主として區分する關係上、ますます觀念的とならざるを得ない。

さうなると、氣温表などを掲げて話を進めてゆくことは必ずしも妥當とは思はれない。併し氣温の平均値は大體その土地の氣候を支配するものであるから、その動きによつて四季の移行を按じ、且つ四季決定の一助ともなればこれに越したことはないと思はれるので、敢へて参考までに採用しながら説明をつづけたいと思ふ。

さて、前章に拉し來つた等緯度にある内地の東北地方の秋田と南滿洲の大連、樺太の敷香と北滿洲の海拉爾との氣温表により、日滿兩國の氣候の性質が異なつてゐることをほば察知することができたが、更に、その氣温表を凝視すると、海拉爾と敷香との氣温が相當の懸隔を示してゐるのに對し、大連と秋田との間にはそれほど顯著な開きはなく、むしろ幾分の相關性さへ認められることは兩地の年平均氣温を見ても明らかである。

また海拉爾と敷香との懸隔もさることながら、これを秋田と比較する時は天地雲泥の差の一語に盡さる。

それと同様、海拉爾と大連とは同じ滿洲にありながら、氣温の上で格段の差を示し

てゐるのに一驚を喫せざるを得ない。

なるほど、廣大な滿洲だけに東端から西端までは二千二百軒、北端と南端の距離は一千二百軒に上る。この南北の距離は實にわが青森と神戸の鐵道延長軒數に匹敵し、大連と海拉爾とは恰も敷香と秋田と同様の對比をなして正南北に立つてゐるが、その氣候上の差異は氣温の上だけから見てもたうてい敷香、秋田の比ではない。

そこで、北偏りの海拉爾地方と南部の大連地方とを包括して、この兩地に通用するに足る四季の區分を決定することは甚だ不合理であり、南北一樣の四季を以て廣い滿洲の全土を律するわけにはいかないと思ふ。

では、どうすることが最も適切かといへば、各地の氣候條件に應じて各箇それぞれに四季の區分を規定することが望ましいのである。

併しながら、實際問題としては、滿洲を幾つかの氣候區に分類し、それによつて各箇に季の區分を行ふといふことは言ふべくして行ひ難く、且つ非常な煩雜を免れない。

せめて、滿洲を北滿洲（哈爾濱以北）中滿洲（新京奉天地方）南滿洲（奉天以南）と三

段調とすれば、やや不自然を免れると思ふのであるが、それとて滿洲を三様の四季に分けることになり、俳句の句作といふ観点からいつても、煩はしいことに於ては大した變りはない。

それで、可及的簡単な分け方として、前述の通り滿洲を南北に二分することを提議した次第なのである。

それも、南滿洲では、日本内地の歳時記そのままの四季を用ひ、北滿洲だけは特別の四季を設定したにすぎないのである。

このやうに、思ひ切つた分け方をした上に、根本的に氣候の性質が異なる滿洲で、南滿洲には内地同様の季を採用するといふのであるから、その是非についても相當の異論があらうと思ふ。

また、餘りに大ざつばに簡単な分け方をしたために、北滿洲では多が大箇月、南滿洲では三箇月といふことになり、その間三箇月の開きを生ずるため、そこにもかなり無理が生じてくる。

殊に南・北滿洲の接壤地域に於て、その不都合は益々大きくなるため、南・北滿洲の分界線については多くの問題が残されてゐる。

もともと滿洲の地勢は、東・西・北の三方が高地となつてゐるので、分りやすくいへば箕のやうな形をなし、中央に沖積平野を抱いて南方を海に開いてゐるのである。

そのため、夏や冬の等温線図を見ても、甚だしく平衡を缺き、夏は西北から東南に向いて等温線が波打ち、冬は夏ほどの甚だしい傾斜は見せないまでも、やはり緯度の線をはすかひに不規則な婉りを見せてゐる。

そこで、南北に二分するといふことについても異議が生れさうであるが、緯度の高い方から低い方へ順々に各都市を並べ、その月々の平均気温を比べて見ると、些少の例外はあるとしても殆ど緯度の高低に並行して気温が變化してゐることに氣づく。

(章末気温表参照)

それで、南・北滿洲の分界線も緯度に従ふことにするのは先づよいとして、一體、どこから南北に分けたらよいのであらうか。

南滿洲、北滿洲の名は日露戦争前後から始まつたらしく、いづれも俗稱であつて、その分界線等については定説をきかない。

明治卅一年にロシアと清國(支那)との間に結ばれた東清鐵道會社設立に關する條約の續約第一條の條文に「東清鐵道ノ支線ハ旅順大連灣海岸ニ達スベキモノナルガ故ニ東清鐵道南滿洲支線トス」といふのがある。この南滿洲支線は、後に東清鐵道の一驛哈爾濱から旅順・大連間のロシア鐵道として實現されたので、ロシア側は哈爾濱以南を南滿洲と見たのかも知れない。

この南滿洲支線の中、今の新京以南のロシア鐵道は戰捷國日本に割讓され、その鐵道運營のため我が國策會社「南滿洲鐵道株式會社」即ち滿鐵が生れた。

さうした關係からか、何時とはなく北滿洲とはロシアの勢力範圍、南滿洲とは日本の勢力範圍といふ風に解釋されるやうになつた。

もとよりロシアの勢力範圍は滿洲里—綏芬河間と哈爾濱—新京間の東清鐵道(舊北滿鐵路)を中心とするものであり、日本の勢力範圍は新京—大連間の滿鐵本線を中心とす

るものであつたから、さうした見地からすれば北滿洲とは新京以北、南滿洲とは新京以南といふことになるわけである。

日露戦争の敗將として知られるクロバトキン將軍の如きも、滿蒙處分論に於て今の新京と哈爾濱の中間を流れる第二松花江のあたりを南・北滿洲の分境と認めて居り、我が國人の間にも北緯四十四度から四十五度の間に分界線を引いて劃定しようといふ説を行ふ人などがある。

また支那側では、大正三年七月に舊東三省郵務管理局を南滿・北滿の兩郵區に分つこととし、奉天に南滿郵務管理局を置き、哈爾濱に北滿郵務管理局を、また今の新京にその分局を設置したことがある。

滿洲が東三省と呼ばれ行政上奉天省・吉林省・黒龍江省の三省に分れてゐた時分には、奉天省の全部と、東清鐵道の北部幹線即ち滿洲里—綏芬河間鐵道線以南の吉林省一部と、同じく東部内蒙古の一部とを南滿洲とし、黒龍江省全部と北部幹線以北の吉林省一部と巴爾虎呼倫貝爾地方及び前述の南滿洲地方以北を北滿洲と見てゐたものも

あつた。

さて、東清鐵道の北部幹線といふのは、北緯四九・三五度の滿洲里から同四四・二三度の綏芬河を結ぶ鐵道なので、緯度の線に平行せず、西北から東南に斜に滿洲を截斷してゐるわけであるが、夏期七月の等温線など、ほぼその線に沿うてゐるので分界線として注目に値するもの一つである。

しかも、この東清北部幹線中最も南部に位する綏芬河は北緯四四・二三度、東清鐵道南部線の終點新京は同四三・五二度であるから、以上の諸説を綜合すると、先づ新京を境界として、その以北が北滿洲、以南が南滿洲といふことに歸納されさうである。地圖を開けば解るとほり、新京はほぼ滿洲の中央に在り且つ今日國都と認められてゐる關係上、この地を以て南・北滿洲の分界點とすることは一應適當と思はれるが、上述の諸説を以てしても要するに政治經濟的見地からする分界であつて、少くとも俳句上の四季を定める上からは直ちにこれに與するわけにはいかない。

ただ、茲に一つ吾々の興味を惹くのは、分水嶺を以て境界線とするといふ方法が残

されてゐることである。

明治三十年にロシアの大蔵省が「滿洲地誌」の編纂に當つて水系其他によつて滿洲を南北に二分したが、それは分水嶺をなす白頭山の東方約北緯四二度東經一二八度の地から西北方に向ひ伊通河、東遼河の間を通り蒙古の沙漠地方に到るもので、北滿洲は全滿洲の六分ノ五、南滿洲は六分ノ一を占めることになつてゐる。

また小藤博士の名論文「西伯利及滿洲ニ於ケル哈爾濱ノ位置」によると、北滿洲の中心點は東清鐵道の敷設後人爲的に哈爾濱に移されてゐるけれども、自然的條件からいへば、露人が「北滿洲の倉庫」と激賞した肥沃な松花江盆地の扶餘(舊名伯都訥)・新京の西北約一五〇軒)こそ中心地となるべきものであるとしてゐる。そして、東清鐵道の豫定線が假定された時、地方物資の吸収を主眼として、興安嶺を越えて嫩江と松花江の合流點に近い扶餘に出で、現在の新京・吉林・寧安を経て浦鹽に到る線が有力な計畫として廻上のぼつたが、經路の迂回、山地通過による經費の膨脹、古都接觸による住民の對露感情惡化等を顧慮して遂に取止めになつたといふ。

しかし、若しこの鐵道が實現してゐたなら、現在の滿洲里—綏芬河間の直線コースの舊東清北部幹線よりも、南・北滿洲の分界線としては遙かに自然的條件にかなつてゐたらうと思はれる。

さて、水系による南・北滿洲兩分の問題に返るが、實際、地勢の上から見て、新京と公主嶺の間を東北に走る分水嶺によつて、滿洲の水系は南流と北流とに分たれてゐるのである。

その分水嶺は、標高二百餘米に過ぎない極めて低いもので、正確に一線を引いて境界とすることはできないまでも、松花江とその支流は例外なしに此處から北流して黒龍江本流に合し、遼河・鴨綠江等は南流して渤海・黄海に注いでゐる。

しかも北流する松花江流域地方と南流する遼河・鴨綠江地方は氣候條件等も大いに異なり、分水嶺附近に於ける河川の結氷期にしても、松花江は遼河より一箇月乃至一箇月半も早く、解氷期も遼河の方が松花江より約一箇月も早いのである。

従つて四季區分の必要から滿洲を南北に兩分するとすれば、この新京と公主嶺の間

を東西に横ざる分水嶺を以て南北の限界とすることが最も適切な方法と認められる次第である。この分界線を緯度によつて示せば、先づ北緯四三・四〇度位に相當するが、今この緯度線の以北を北滿洲、以南を南滿洲と見て、緯度の高低に應じ順次各地の平均氣温を列記し、讀者の参考に資したいと思ふ。(註・康徳八年時憲書に據る)

緯度	緯度											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大連	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
營口	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
錦州	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
奉天	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
遼陽	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
吉林	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
長春	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
齊齊哈爾	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
海拉爾	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
滿洲里	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0

新 綏 綏 丹 東 哈 爾 濱 齊 齊 哈 爾 克 魯 克 山 安 東 錦 州 瀋 陽 長 春 大 連 營 口	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
新 綏 綏	12.0	11.0	10.0	9.0	8.0	7.0	6.0	5.0	4.0	3.0	2.0	1.0
綏 丹 東	11.0	10.0	9.0	8.0	7.0	6.0	5.0	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0
丹 東	10.0	9.0	8.0	7.0	6.0	5.0	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0	-1.0
東 哈 爾 濱	9.0	8.0	7.0	6.0	5.0	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0	-1.0	-2.0
齊 齊 哈 爾	8.0	7.0	6.0	5.0	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0	-1.0	-2.0	-3.0
克 魯 克 山	7.0	6.0	5.0	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0	-1.0	-2.0	-3.0	-4.0
安 東	6.0	5.0	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0	-1.0	-2.0	-3.0	-4.0	-5.0
錦 州	5.0	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0	-1.0	-2.0	-3.0	-4.0	-5.0	-6.0
瀋 陽	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0	-1.0	-2.0	-3.0	-4.0	-5.0	-6.0	-7.0
長 春	3.0	2.0	1.0	0.0	-1.0	-2.0	-3.0	-4.0	-5.0	-6.0	-7.0	-8.0
大 連	2.0	1.0	0.0	-1.0	-2.0	-3.0	-4.0	-5.0	-6.0	-7.0	-8.0	-9.0
營 口	1.0	0.0	-1.0	-2.0	-3.0	-4.0	-5.0	-6.0	-7.0	-8.0	-9.0	-10.0

南滿には日本の季を

現在日本で行はれてゐる俳句の上の四季は、陰陽五行説による立春・立夏・立秋・立冬を各季の初めとした分け方であるといふ。

虚子編「新歳時記」の序文によれば「この五行説は北支那を中心として決めたものであるさうだが我國にもよくあてはまり、感じを主とする俳句に最も適してをるのである」とのことである。

ところで滿洲は、萬里の長城を境として北支那と接続し、殊に安東・大連・營口・錦州等海に近い滿洲の沿海都市や熱河地方等は、氣象學的に見ても亦氣候の感觸からいつても、四季を通じ殆ど北支那の首都北京と同様なのであるから、我が國の歳時記の四季は、南滿洲の特に南偏りの地方のためにつくられたものといつても過言ではなく、そつくりそのままこの地に當てはまるのは當然である。

前章で述べた露國大蔵省編「滿洲地誌」は、新京の近傍を流れる伊通河と、東遼河との間を以て南・北滿洲を分界したが、この劃定線は、本稿で論斷した新京と公主嶺間の分水嶺による兩分とほぼ合致してゐる。

同誌の主張するところによれば「滿洲を斯の如く二分することは昔に河系のみならず、氣候、植物、農業等の差異によるものである。此等の諸條件を通觀するに、北滿洲は地理上西比利の一部分を組成し、南滿洲は全然支那北部の一部分を形成し……云云」とある。

右の説によつても、北支那を中心として定めた五行説による四季の區分が、日本内地と同じやうに、「支那北部の一部を形成し」氣候風物の似通つた南滿洲に通用することとは諒解に難くあるまい。

筆者自身のながい滿洲生活の經驗に照らしても、この事實は決して不自然ではないと確信する。

大連あたりの氣候の感じからいへば、春は二月中旬から五月中旬までとした方が、

二月初めから四月末まで三箇月とする分け方よりも正確であると思ふ。

嚴密にいつて、二月—四月を春としてゐるもの、立春から立夏の前日までが春であるならば、實際は陽曆二月四五日頃から五月五日までが春の筈である。それを、二月初めから四月末までを春と定めてゐるやうに、初旬とか中旬を以てする分け方をせず、四季を十二箇月に月分けにして劃當てることについて若干の喰違ひが出てくることは不可避である。

まして、滿洲のやうに、日本の二倍餘もある廣大な地域をわづか二種の四季を以て律しようといふのであるから、そこに相當の無理が生じてくることは否まれない。

本稿の提案する北滿洲の冬は六箇月、南滿洲の冬は三箇月となつてゐる。兩者の間に三箇月の大差があるわけである。この開きを縮めようと思へば、關東州あたりの實際に即して十月中旬から翌年二月中旬まで四箇月間を冬とする方法もないではない。

哈爾濱で發行される句誌「龍組」同人の區分に從へば、北滿洲の四季は、十月—三月が冬、三月—六月が春、六月—八月が夏、八月—十月が秋となつてゐる。

また哈爾濱の案内書によれば、十一月—四月が冬、春は五月だけ、六月—八月が夏九月—十月が秋といふ分け方である。

これらの分け方はみなそれぞれに理由や根拠があることであらうが大體に於て個人の経験や觀念から割出したものだけに、その區分もまちまちとならざるを得ない。

「健祖」同人による區分については、多年北滿洲に住みつき且つ俳句に専念して居られる方々が定められたのであるから、最も穩當なものであることは容易に察知することが出来る。しかし三月と六月、八月、十月が、それぞれ春夏秋冬の各季に重複してゐることは句作する人々にとつて、以上各月を孰れの季とすべきか去就に迷ふので、四季のうち何方かに決定されなければ不便である。

また重複の各月を中旬から兩季に分けるといふ解釋もできないことはないが、これとて十五日と十六日を以て各季の境目とすることは煩はしいと思ふ。

かうして、直截な分け方をすると、自然そこに發生してくる不都合を忍ばなければならぬ羽目に逢着するので、やはり相當の英斷を必要とすることになる。

聊か自己辯護めいてきたが、思ひ切つて南滿洲に日本内地並みの四季を採用したとと、北滿洲の冬を六箇月、春夏秋をそれぞれ二箇月宛としたことにより、所により或は實情にそぐはぬ點も出てくることがあり得ると思ふ。

ただ、筆者としては、一年中の滿洲の氣候や自然現象を達觀して、ここに提案した程度の四季の分け方ならば、まづ大體に於て、曲りなりにも南・北滿洲に當てはまり得ると信するのである。

四季を斯く裏づける

春

南滿洲——二月・三月・四月

北滿洲——四月・五月

滿洲で最も溫暖な大連あたりでは、十二月下旬から戸外の池でスケートが出来るやうになるが、二月十一日の紀元節から十五日ごろにかけて氷滑場には危険信號の赤旗

が立てられる。

このころから、すっかり春めいてきて早くも三月十日の陸軍記念日には、雑草の下
萌を發見することがある。

南滿洲の河川の解氷がはじまるのもこの前後で、明治三十八年の奉天大會戰の時、
三月九日に皇軍が渾河の氷上を渡つてしまふと、その翌日には解氷が始まつたことは
有名な話である。おもしろいことは、内地地方は氣温が急に昇るので、この解氷が、
南方の河口よりも北方の上流地方から先にはじまり、その間一週間乃至十日の差があ
ることである。一方北滿洲の河川はといへば、三月にはまだ堅氷がはりつめてゐて、
やうやく四月に入つて解氷するのである。

大連の終霜は三月三十一日、終雪は三月二十七日となつてゐるが、北滿洲の新京や
哈爾濱は、それぞれ終霜四月二十九日、五月四日、終雪四月二十三日、四月二十九日
となつてをり、標高の高い興安などは終霜六月二日、終雪五月二十二日となつてゐる。
昭和十五年の春、筆者は大連を出發して奉天、新京經由哈爾濱まで旅行したが、そ

の時の旅行記の一節にこんなことが記されてゐる。

——大連を發つたのは四月二十二日の夕方であつた。星ヶ浦の櫻はまだ咲いてゐな
かつたが、市中の櫻は満開で、杏の花はもう盛りを過ぎてゐた。

——(註、翌日)奉天の杏の花は五分咲か七分咲といつたところであつた。大連のよ
りも紅梅を思はせるほどに紅味をおびた花が多く、私は、その花を見て、滿洲建國の
年リットン卿以下の國際聯盟調査團一行を迎へたころの奉天を思ひ出した。たしか四
月二十一日の夜であつたと思ふ。杏の花が一行の宿所に當てられたヤマトホテル前の
中央廣場に咲きはこつてゐたのを今も忘れることができない。

——(註、その翌日)新京で見た杏の花は、まだ蕾が固く一週間やそこらでは綻びさ
うな氣配も見えなかつた。それでも白楊の並木は、結々した新芽をふいてゐたのに。
——ハルビンでは(註、四月二十六日)まだ冬の眠りから覺めやらぬといった風情で、
木々は枯死したかのやうに味氣なく立ちつくしてゐるばかりであつた。

——關東州の方では、あれほど新緑が萌え出てゐたのに、北に進むに従つて次第に

色隠せ、もう、新京から哈爾濱の沿線には、一つの緑も見ることにはできなかつた。

——第二松花江附近は、ところどころ沼地があつて、枯れ葦が鏡のやうに空を映じた水面を縁どつてゐたが、その水面には胡麻をまいたやうに黒いものが點々と浮かんでゐた。よく見れば、それは鴨であつた。この三月中旬であつたか、公主嶺から南下して来た友人が「鴨の群とちやうど千山の邊でぶつつかつた。僕は急いで公主嶺にかへらなきやならん。もう二三日もしたら、公主嶺までやつてくるだらうから」と私にいつた。私は「ほほう」と感心すると、彼は「君が知らんとはをかしいね。それこそまつ黒になつて川邊に下りて来て、そんな時は棒で殴り殺せるくらゐたかつてゐるものだよ」と話してくれた。その話をきいて十日餘りもたつた三月の末ごろ、親戚の男が「錦州から射つて来ました」といつて小鴨を届けてくれた。雁と鴨を射つて来たのださうだが、時季おくれのため大してとれなかつた、とこぼしてゐた。いま、わが汽車が蕪進する沿線の沼澤地にその鴨群が下り、列車の轟音に驚いたものか沼地に浮いてゐた夥しい鴨は飛び上らうとはせず、水面に水脈をひいて線路から遠くの方へ泳いでゆくのが見えた。私が、大連で友人の話をきいて一箇月あまり過ぎてゐるのに、今ごろこんなところに鴨群がうろついてゐたのかと、今更のやうに友人との對話を記憶に呼び起したのであつた。その夜哈爾濱の客舎で、地元の新報を讀みながら、四月二十八、九兩日の日曜祭日を利用し、解氷後間もない松花江で新聞社主催の鴨獵會を舉行するといふ記事に私は興味を惹かれた。この三月中旬友人から鴨獵の話をした時が、南滿洲に春が動きそめた時であり、今また漸く河水が啓開して春が兆さうとする北滿洲で鴨獵の話をしきくことは、南北滿洲の春の推移と渡鳥の進退とを思ひ合はせて私には、なにかその因果關係が面白く感じられた。云々——

その年、四月二十八日の復活祭に、哈爾濱中央寺院の聖障の上に飾られてゐた花はすべて室咲きのもので、わづかに春の先觸れをしてゐるものは猫柳の芽のふくらみだけであつたがその翌日、筆者は大連の星ヶ浦で満開の櫻の下で花見酒に浮かれてゐる市民を見て、南と北とではかうも違ふものかと驚いたことがある。

とにかく南滿洲の春は早春の感じがなく、四月に入つて春櫻桃梨一齊に咲き揃ふか

と思ふと晩くも五月中旬までにはすつかり濃緑の葉に覆はれてしまふ。花が咲いて青葉になるまでの過程はまことに加速度的で、晩春などといふ感じは全然見あたらない。特に北滿洲では早春も晩春もなく、木の芽が出たかと思ふと忽ち繁茂して夏になる。わけて四、五月の候は氣温の高低が定めない時で、昭和十五年五月十日の新京の如き午前四時には八度であつたものが、午後四時には三十二度（華氏約九〇度）に上昇したことがある。つまり一日の中に冬と夏とが來たわけで、冬から夏へ一足飛びに移行する北滿の氣候も、かうした氣温の變化に左右されるのかも知れない。

夏
南滿洲——五月・六月・七月
北滿洲——六月・七月

滿洲は寒暑が激しい。終霜を五月にまで持越し、南滿洲より春の訪れが遙かにおくれる北滿洲さへ、六月には、もう立派に夏姿となつて南滿洲と歩調を合はすばかりか六、七、八月の三箇月間は日本内地のどの地方よりも高温となる。

日本内地では、揃つて八月に一年中最高の平均氣温となるが、滿洲では一箇月早く、すでに七月に最高氣温を現すことも、冬から夏へ移行する速度の目ざましさと夏の短さを物語つてゐる。

季節風の影響で、夏は雨が多く、海洋に支配される南滿洲の沿海地方に比し、海から遠い内陸地方、つまり主として北滿洲の奥地になるほど氣温が急激に上る。これまで観測された最高極氣温は一九一九年七月二十三日北滿洲扎蘭屯に於ける四二・六度であつて、日本では絶対にない記録ださうである。また南滿洲のいはゆる蒙古寄りの鄭家屯でも、一九二〇年七月一日に三九・八度といふ高温が観測されたことがある。

これは、夏季大陸旋風が興安嶺を越えて北滿洲の平野に吹き下ろす時に生ずる熱風、即ち風炎フウエンによるものと見られてゐる。

このやうに、南・北滿洲とも夏は暑さが酷しく、特にこの季節は大陸的氣温の變化もやや緩和してゐるので、七月の等温線圖に照らして見ても、南・北ともほぼ共

通の季節を持つてゐるといつて差支へない。

この頃になると、三月四月によく黄塵をまいて吹いた南西からするいはゆる蒙古風も吹き絶えて、南滿洲地方では南東風が卓越し、北滿洲では南風が吹きそよく。

雨の少い滿洲ながら六・七・八月の三箇月間は雨季に當り南滿洲では年降水量の約六〇パーセント、北滿洲では七〇パーセント強がこの時期に降つてしまふ。

これと反對に、日照時數を見ると、やはり夏が最もながくこの時期に限り、北滿洲の方が南滿洲よりは概して日照時數が多く、夏至の日など黒河の如きは大連より一時間半も日が永い。また日本内地の等緯度の地と比較すれば、年に一千時間以上も滿洲の方が天日に恵まれてゐることになる。

秋
南滿洲——八月・九月・十月
北滿洲——八月・九月

滿洲の夏は雨が多いが、八月になると、雨の日は寒冷をさへ覚える。そして、一雨ごとに冷涼の氣が増してくる。

大連を除いて、他の各地は七月の平均氣温が最も高いが、八月に最高を示現する大連でさへ、立秋の八月八日ごろには流石に秋めいてくる。そして、毎年八月中旬の日曜日を最後として近郊の海水浴場もめつきり淋しくなる。

八月に秋を感じるのは、やはり滿洲の方が日本内地よりは顯著である。

殊に北滿洲にあつては、日中はひどい暑さを覚えるが、夜の秋冷は一入である。八月末にもなれば、哈爾濱のタクシ一の露人運轉手など毛皮外套を用意してそれを着るほどである。

そして興安嶺以西の興安、海拉爾、滿洲里等は九月の上旬から中旬には初霜が降り、興安の如きは八月末に降霜を見ることがある。南滿洲の各地は概して初霜は十月に入つてからであるが、哈爾濱、克山、齊々哈爾、黒河、索倫等は九月下旬に降霜があるのが例となつてゐる。そして木々は紅葉する迫もなく落葉する。

かうして、東の間の春を待つた北滿洲は、また一瞬のうちに冬にかけ込み、興安の如きは九月末に初雪が降る。

冬
南滿洲——十一月・十二月・一月
北滿洲——十月・十一月・十二月・一月・二月・三月

滿洲の冬はながい。それは北滿洲ほど著しい。

北滿洲は世界最寒地として知られるシベリヤのヤクーツク地方を眞北に控へ、それに朔風を防ぐべき高山もないので寒風がそのまま吹き通し、寒氣凜烈である。

それも、北方ほど寒いといふのではなく、中部の平原地方よりは西部の大興安嶺山脈や東部滿洲の鮮滿國境をなす山岳地帯に於て特に甚だしい。一九二二年一月六日大興安嶺麓の免渡河では零下五〇・一度といふ低極が觀測され、やはり同年一月十五日に零下四九・三度を示したことがある。

南滿洲でも開原など零下三六・六度を示したことがこれまでに二度もある。

寒氣の最も酷しいのは南・北滿洲とも一月であつて、南滿洲では一月下旬の寒さが底を割ると間もなく春めいてくるが、北滿洲では例外なしに三月まで平均氣温は

零度以下にあり、依然寒威嚴烈である。

異年の平均氣温が零度とある日を調べて定められた次の採暖期間を見ても、南滿洲と北滿洲との冬の長さがほぼ想定できようと思ふ。

南滿洲	安東地區	十一月五日—三月二十日
	奉天地區	十一月一日—三月二十五日
北滿洲	新京地區	十月二十六日—三月三十一日
	哈爾濱地區	十月十六日—四月十日
	齊々哈爾地區	十月十日—四月二十日
	海拉爾地區	十月五日—四月三十日

初霜も、最も寒い興安嶺以北の地や中部平原地方の北滿洲地方にあつては九月上旬から下旬にかけて殆どその洗禮をうけ南滿洲の熊岳城、鞍山、奉天、錦州等は十月上旬、大連、旅順近傍だけが十一月に入つてからであつて、旅順の十一月十三日が最も晚い。併し、空氣の乾燥した滿洲であるから、初霜を見る以前にすでに氣温が零度以下を示すところも少くなく、蒙古寄りの鄭家屯、洮南の如きは最低氣温零

度以上の日は無霜期間より十一日乃至十二日も短い。従つて、初霜以前にすでに冬の襲撃をうけるものと見る事ができ、初雪は初霜よりややおくれるのが例である。

北滿洲の松花江水系は、十月にはすでに流水を開始し、十一月には殆ど例外なしに結氷してしまふが、南滿洲の遼河など十二月末に結氷を見ることは珍しく、先づ一月に入るのが通例であつて、ここにも南・北滿洲の冬の消長が見られると思ふ。

とにかく、冬に入らうといふ滿洲の十月ごろは、春の四、五月の候と同じく氣温の高低が最も發達する時期なので、冬から何時の間に夏となつたのかわからぬやうに、夏から冬への推移もまた目ざましい。

なほ、滿洲の各地は一年三百六十五日の中、先づ百日内外の快晴日數を持ち、決して「曇りがちな旅の空」ではない。特に十、十一、十二、一、二、三月等は快晴の日が多く、各地いづれも一箇月の中十日乃至十五日ぐらゐの快晴の日があり、單に天日に恵まれるだけでなく、この時季に限つて温度が高く、且つ風速も弱いので寒氣も緩和され、氣遣いで見るよりは遙かに快適な冬である。

附録一

奉天附近に於ける植物の開花期